
インギア

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インギア

【Nコード】

N4812A

【作者名】

佳生

【あらすじ】

人間と人形、そのどちらでもある機融人。人形が隠れながら生きる街で、若き統率者達は、理想の街を創り上げる事が出来るのか。

第一話：外れた齒車

いつだったか。

私が生まれる、ずっとずっと昔のこと。

ある二人の人間が、人間の人形を創りました。

一人が人間そっくりな人形を、一人が人工の頭脳を。そうして、人形が自分で考えて動けるようにしたのです。

しかし、人間は彼らの事を道具の様に扱いました。

人間よりも様々な事をこなし、体も丈夫な彼らを、人間はなく人形としか見なかったのです。

人間と同じように、感情を持つ彼らを道具として扱うことは、自分自身を道具として扱うに等しいということに気付かずに。

『人対機戦争』

私達がそう呼ぶ戦争は、読んで字のごとく、人と機械、人と人形の戦争を表しています。

創った者と創られた者。

その二つの間に起こった戦争はたった一年で、それだけの期間で終わりを告げました。結果は人形の全滅。

しかし、本当は人形が負けた訳ではないことを、誰もが知っています。

この戦争で負けたのは、人間でも人形でもなく、双方が住む、土地そのものでした。

水は干上がり、木々は焼け、大地には大きな穴があき、山は崩れ、谷は埋まり、村や町もことごとく壊れ、全てが消えたようでした。

ですが、これだけならば、人形が敗北した理由にはなりません。

なぜならば、人形は食料が無くても生きていくことが出来るからです。

人形が敗北したのは、その後に起きた災厄のせいでした。

人間達が後退していくなか、無益な争いに嫌気がさしはじめた人形達が駐屯していた、まさにその場所に、落雷があったのです。

とても大きな落雷で、それは紫に輝く冥界の剣のようだったそうです。

自然が人間の味方をしたことを証明した瞬間に、人形は全滅していました。

落雷の衝撃、いえ雷撃のせいで、人工の頭脳が再起不能なほど、ダメージを受けてしまったのです。

人工の頭脳を取り替えることが出来れば、何も問題はなかったのですが、それを行なえる人形も、敵を助けるような事をする技師もいませんでした。

それでも。

それでも、生きているのです。存在しているのです。私達、人形は。

……必死に。

第二話：拾う齒車 花屋

縦に長い建物の間を、少年が一人、息を切らせて走っている。今、少年は生きるために逃げている最中だった。

なぜ自分が殺されそうになったのか、全くわからないのだが、黙っていたら殺されてしまう。

少年は逃げるしかなかった。

まだ死にたくはない。

だから命をかけて走っていたというのに

「いたぞーっ！！」

「！？」

少年の頑張りも虚しく、塀を乗り越え、地に足を着いた瞬間、丁度路地を曲がってきた男に見つかって、大声を出された。

無慈悲に響く声に、少年の心臓が止まりそうに冷え、同時に死への覚悟が決まる。

少年がまだ若い命を手放す決心を固めかけたときだった。

「こちらに、いらっしやい」

さきほど自分が乗り越えた塀の上から“春”の様な声と共に、白い手が伸ばされていた。

驚いて半歩後退した少年だったが、塀の上にいた青年が余りにも穏やかに微笑んで手を差し伸べるので、少し警戒しながらも、その手をとってしまった。

目の前の眼鏡をかけた穏やかそうな青年が、果たして信用の置ける人物なのかからないのに。

自分の手をつかんだ少年に、青年は笑いかけると、一気に塀の上ま

で持ち上げて、細い細い道の上に立たせる。

「着いてきて下さいね」

暖かく穏やかな声に、少年は何となく安心して、塀の上を青年に着いて行く。

その際、青年の長い髪が目について、少年は何度か目を擦った。そうして気が付いたのは、青年の結わえられた髪が、金髪だということだった。この街で、少年は金髪の人間や人形を見たことがない。ぼんやりと見とれていると、金色が急に視界からずれて、少年は驚いた。

実際は青年が塀を降りただけなのだが、少年はそれに気付くまで数秒の時間を要するほどに金色に魅せられていたようだ。

青年が降りたのは、この街では珍しい、縦ではなく横に広い建物の前で、その屋敷の軒先には色彩りの花が笑顔で並んでいる。

花なんて眺めるのはいつぶりだろうか。

少年は今の今まで、この無機質な街の中に花屋があるだなんて知らなかった。

「あら、ゼオンさん？ 今日も晴れましたなあ」

「はい。ところで、まだ場所は空いてますか？」

「ああ、空いてますよ？ 後ろの坊やのことなら、ご心配なく」

ゼオンという名前らしい青年と会話をする、若い和服の女性。空いてるとか心配ないとかよくわからない話をしている。

その女性が、上品に微笑んで手招きをした。

「さ、坊や。こっちに来て隠れなさい？ また怖い人に見つかってしまっさかい」

しかし、少年はゼオンの後ろにつつ立つたまま、動こうとしない。大人を警戒しているのか、イントネーションの違う言葉や、この街にはありえない花屋という空間に怯えたのか、少年はゼオンに背を押されても、それ以上、動くことはなかった。

「……………」

そんな少年の頑なな様子に、ゼオンも女性も困って顔を見合わせるだけで、どうすることも出来ない。

こんな時、無理矢理に連れていくことが一番良くないのだ。

しかし、ゼオンも彼女も少年だって、永遠に立ち続けられる訳ではない。

どうしたものかと悩んでいたところに、花屋から小柄な人影が出てきた。

「スマレさ〜んっ！！……………」

あからさまにゼオンと少年に反応した彼は、軽い足取りでチョココンと二人の前で立ち止まる。

一見、女の子と見間違えそうになるほど、可憐な容姿の彼は、ゼオンの後ろに隠れた少年に不思議そうに首を傾げた。

まさに、小鳥のように。

「僕、テイオっていうんだ。このお兄さんがゼオンで、あのお姉さんがスマレさん。…君は？」

近づいてくるなり、自己紹介を始めた赤毛の可愛い子に、少年は一度大きく瞬きをして、キョトンとテイオを見つめた。

テイオの方は、慣れた様子で、笑顔のまま答えを待っている。

「ユキ」

「ユキ？」

「うん」

少年・ユキの声は、とても小さかった。

まだ気が気でないようで、不安そうにゼオンとテイオを交互に見ている。

ゼオンはテイオと目が合うと、柔らかに微笑んで、今度こそユキの背を押してやった。

同時にテイオがユキの手を掴んで、店の中に連れていく。

店の中に入ってしまったら大丈夫だろう。

同じ境遇の子が数人、大人も含めれば、十数人はいるはずだ。

「……ご苦労さまです」

話題を探すように、ゼオンが苦笑する。

「はい、ご苦労さま。でも、お互い様ですやろ？」

店の前が二人きりの空間になったところで、双方の表情は一樣に暗くなった。

心なしか、花も元気がないように思える。

「最近、多くなってきましたなあ。」

…本当に“人形狩り”なんてこと、するんですやるか」

「そうなってほしくありませんけど…否定できないのが辛いところです」

花屋の女主人スミレの口から出た“人形狩り”という単語に、ゼオンは辛そうに瞳をふせる。

それが今の、街を取り巻く状況。

“人形狩り”というのは、読んで字のごとく、人形を狩るということとで、その昔、戦争で敗北した人形の残党を撲滅しようという行動だった。

それが近々、本格的に動きだそうとしているらしい噂が、真しやかに囁かれている。

もし、それが本当なら、この街は大変なことになってしまう。

なぜなら“人形狩り”の対象となっている者の全てが人形ではなく、本来“人形狩り”の側にいるべき‘機融人’なのだ。

‘機融人’というのは、機械と融合した人間のことで、存在自体が人工の人形とは全く違う。

対象となってしまった機融人は、他の機融人と違い、体の大半を機械で維持していた。

なので、“人形狩り”の方でも見分けがついていないのだ。

人形だったら狩られてもいい、という訳ではないが、それにしてもこの状況で“人形狩り”が動き出したりなどすれば、ただの殺し合いになってしまう。

そうなってからでは遅いのだ。

だからこそ、ゼオン達のような若者が立ち上がらざるをえなかったのだろう。

ゼオンは、今でこそ

“反人形狩り・インギア”のリーダー的存在だが、実際はどこにもいる極々普通の青年なのだ。

髪が金色で、少々人より体が強いだけで…。

「……こうしていても、仕方ありませんね。私、家に帰ります」

暗い顔で沈黙したまま立っていた無駄な時間を悔いるように、ゼオンは苦笑してスマレに礼をした。

スマレもゼオンに同意したのか、軽く表情を崩して、店の中に戻ってゆく。

花が風に揺れる音を聞きながら、ゼオンは塀を飛び越えた。

“人形狩り”が動き出したら、自分達は一体どれだけの人を救えるのだろうか。

第三話：拾う齒車 凄腕技師

街の外れにある、正方形の箱のような木造の家。

そこがゼオンの唯一の領域だった。

こぢんまりとした住居の中は、見た目よりもすっきりしていて、以外と明るい。

絵の具と薬瓶が混雑している棚が、家の片方に寄って配置され、その下には紙やキャンバスが並んでいた。

そのせいか、彼の家は絵描きならではの、独特の香で満ち、その中にそこはかとなく花屋から貰い受けた花が咲き誇っている。

ゼオンは、その中で女神と向き合っていた。

ゼオンと同じ、金の髪的女性。

この家には似付かわしくない、美しい装飾の施された額縁におさめられた女神は、柔らかな朝日のように微笑んでいた。

その微笑みこそが、今までのゼオンを街につなぎ止めていたもの。

女神の加護があるからこそ、自分はこの街で暮らせる…と、少なくとも本人はそう思っているようだ。

「……ちいゝす。ちょっと開けてくんね？」

トントンというよりは、ドンドンという音で、誰かがゼオン宅の扉を無遠慮に叩いた。

ゼオンはその音で意識を現実に取り戻すと、慌てて扉を開ける。

そして、息を飲んで驚いた。

「な、薬貸して薬。…出来ればタオルも」

「どうしたんですか？ ああ、取りあえず中に入って！」

「このまんま入ったら、家の中に血がたれるぞ？」

「いいから入って!!」

「……………はい」

バタンツ！

扉の前にいた短い黒髪の青年を、無理矢理に家の中に入れたゼオンは、すぐさま青年にタオルを渡す。

「いや、悪いな。ビックリしただろ？」

渡されたタオルで傷口の額を抑える青年は、数少ないゼオンの友人だった。

彼は一流の技師として慕われている反面、“人形狩り”には要注意人物として警戒されている。

おかげでこの街ではそこそ有名なった。

千里のスゴウ。

それが、彼の別称だ。

「……こんなに血が出てますよ？ 目の方は大丈夫なんですか？」

傷薬をもってきたゼオンを、スゴウはキュインツと作り物の瞳を動かさせて笑みを浮かべた。

「心配すんな。擦ってすらねえよ」

傷口からタオルを外したスゴウは、ゼオンの持ってきた薬を自分で傷に塗り込む。

いつも思っのだがそんな乱暴な塗りかたをして、痛くはないんだろ
うか。

「…………っ、しみる…………！」

「だったら、もっと優しく塗ればいいじゃないですか」

嘆息するゼオンに対し、スゴウは痛みに顔をしかめながら、

「しみた方が、よく効いてるような気分になるじゃねえか」

などと言う。

苦笑するゼオンは、薬の塗り終わった傷口に、ガーゼをあてて、テープで止めてやる。

それから、事の次第を聞こうと、スゴウと対面する位置に椅子を動かして腰掛けた。

「で、どうしたんですか？ その傷は」

出血の量にしては、案外浅い傷だったか、場所が急所だけに、ただ事ではなかったのだろう。

菩薩のごとき笑顔のゼオンを前に、スゴウは逃げることなどできなかった。

「……実は、ジャックとはちあわせしてな」

「ジャックと？ よくその程度ですみましたね」

「……………お前、俺のこと馬鹿にしてんのか？ 俺がジャックごときに裂かれる訳ねえだろうが」

その自信は一体、どこからくるのか。

ゼオンは呆れてしまつて言葉が出ない。

スゴウは視線をそらして、ガーゼをいじる。

「確かに、ちつたあ、危ねえとは思つたけど、負ける気はしなかつたぞ」

悔しいが、スゴウのその意見は、決して過大評価ではない。

知らぬところで同士を増やしている《反人形狩り》だが、ゼオンが知るかぎりでは、一番腕利きで最強なのはスゴウなのだ。

それは対抗勢力の《人形狩り》から目を付けられるほどのもので、ジャックにも劣らない。

「あいつと俺の違いって、殺すか殺さないかぐらいしかないんじゃないや

ねーの？俺は殺しなんか、まっぴらごめんだね」

肩をすくめるスゴウに、ゼオンは今朝の新聞記事を思い出す。

旧文明の怪人甦る。

その昔、人間の女を殺し回った《切り裂き屋・ジャック》
神出鬼没の殺人鬼のごとく、本日の事件についても、証拠も目撃者
も皆無であった。
手口は残虐であり、筆舌に尽くしたくはない。

「んでな、姿はやっぱ見えなかった……一生の不覚！」

街に出没した殺人鬼と遭遇したというのに、彼はあくまでも普通である。

「程々にして下さいよ」

嘆息するゼオンに、スゴウは笑って返す。

分かっているのか、いないのか。

その内、

「これが彼の最後の笑顔でした」

なんて事になりそうで、ゼオンは心配でしょうがない。

当の本人は

「心配はかけてるけど、迷惑はかけてねえだろ」

と、屁理屈を言い、全くおとなしくしてくれないのだ。

これではゼオンもどうしようもない。

困り果てた表情のまま、ゼオンが座ると、向かい合ったスゴウが、深刻な面持ちになって、手を組み合わせる。

「ジャックに遭ったのは、びっくりハプニングだからいいんだ、別に。問題はそっちじゃねえんだ」

「と、言つと?」

スゴウは目がいいだけではなく、情報も早い。

確実せいのある情報は、すぐにスゴウに伝わり、ゼオンへと届けられる。

その速さで、街の誰しもが《人形狩り》に賛成している訳ではない事がうかがえる。

それは、街の最高権力者も、同じ事だったようだ。

「街長の息子が動いたぞ」

「彼は、確か」

「ああ、奴は《イン・ギア》派だ。親父を引きずり落として、街長になつたらしいぜ。公表はされてないが」

「……………そうですか」

少しばかり、肩の荷が下りて、ゼオンは表情を綻ばす。

スゴウも笑いかえすが、油断はできない。

「つつても、《人形狩り》は、もうでっけえ組織になつてゐる。今更、街の政策で押さえ切れるかどうか………」

「無理、でしょうね」

「だよな」

「しかし、大見え切つて行動も出来なくなるでしょう。私たちに、協力者が多いですから」

にこりと笑うゼオン。

《人形狩り》が考えているよりも、《イン・ギア》に賛同するもの

は多い。

スゴウのように、顕著な人物の方が少ないのだ。

人形と勘違いされた人を、捕まえた振りをして、花屋まで連れていくのが、《イン・ギア》本来の姿。

《人形狩り》を蹴散らすような、力強いメンバーはスゴウくらいの者だ。

「さて……………どうしますか」

腕を組んだゼオンの瞳が、眼鏡の奥で細まる。

スゴウも同じく、腕を組み、瞳を閉じた。

第四話：拾う齒車 若街長

「父上っ！！」

ドバンッ！

と、扉を壊す勢いで、街長室に入ってきた息子に、街長は大きく肩を跳ね上げた。

「何をお考えなのですかっ！ 《人形狩り》などと……………いつまで過去を引きずるおつもりなのですか！？」

何の迷いもなく歩より、街長の大きな机を叩いた息子に、街長はただ立ち尽くす。

「今やるべきは《人形狩り》ではなく、海側の防波堤の強化、旧文明の驚異を取りのぞき、滞っていた市場の治安回復の問題を片付けることです！」

バンバンバン！

と机が叩かれるたびに跳ねあがるインクツボと息子の形相に、街長

は言葉でもない。

今、街長を叱咤している青年は、その名をルークと言った。

刃のような鋭い瞳と、外へ跳ねる癖のある硬質の長い髪は、結わえられもせずに背に流れている。

常日頃から、書類の処理や整理をしていたルークには、街の財政は筒抜けだ。

それに加え、ルークは正義感が強いので、この状況を黙って見ている訳にはいかない。

悠長にしていられない状況なのは、ルークだけでなく街長も分かっているはずだ。

今までこの街を治めてきたのだから、分からないほうがおかしい。

「《人形狩り》など、愚考の極みっ！ 人形も人間も、その間で生きる者も、同じ同志であると分からないのですか？ 今までこの街を支えてきたのは、人間だけですか？ ここまで街が発展できる基盤を作り上げたのは、街民であり、人間だけではない事に、よもやお気付きにすらなっていないのですか！？」

いつしか自分から視線を外し、街の見渡せる大窓の外に視線を移した父の背を、ルークは険しい表情で見つめる。

父の考えが分からない。

「…………もう、決まったことなのだよ、ルーク」

「父上……………！」

街を見下ろしながら、街長は他人行儀に言い放った。

驚愕し落胆したルークを余所に、街長が話を勧める。

「だから、アークを養子に出す事にしたんだ」

その一言は、ルークの思考を停止させるのには、十分なものだった。

アークとは、ルークの六歳年下の弟のことだ。

アークはある事故によって、脳に多大なダメージを受け、表現力や言語力の殆どを失ってしまった。

更に、損傷した脳を補うために、一部を機械化させたのだ。

「な、なぜ、アークを養子にする必要があるのです？ アークは人形じゃない！！」

私情で声を荒げた息子に、街長は僅かに驚いて、ルークを振り向く。

「何をそんなに慌てているのだ？　アークにはここではなく、もっと自然の溢れた場所で療養して……………」

「嘘だ！　父上、嘘をつきましたね？　父上はアークを殺すつもりなのでしょう！？」

「な……………」

瞳を見開いて、冷や汗を流す父を、ルークは射殺するように睨み付ける。

「今まで、貴方は何度、アークとお出かけになりましたか？　俺は、全部知っていましたよ。　だから、もう貴方はアークに触れさせない」

そう低く言ったルークの瞳には、決意とともに暗い色が瞬いている。

ゆっくりと一歩ずつ確かめるように近づいてくる息子に、街長の手は、机の一番上の引き出しに伸びていた。

そこには、常に拳銃が入っている。

ルークはそれを知らない。

「……………そうか、だからか」

呟いた父の言葉にも、ルークの歩は止まらなかった。

街長の手は、拳銃を掴む。

「邪魔だったのは、お前だったのか？ ルーク」

「あ……………！？」

轟いた銃声に、ルークの体は跳ねるようにして、倒れた。

驚きに見開かれた瞳のまま、ルークは天井を見つめ、起き上がろうとはしない。

熱を持った肩が、徐々に痛みを訴え始める。

反射神経を最大限に発揮した結果の負傷は、それでもひどく、肩を中心に液体が速いスピードで滲んでいつているのが分かった。

撃たれた衝撃に体が驚いてしまっていて、上手く動かす事ができない。

一瞬、本気で父親に殺されるとも考えたが、そうはならなかった。

「ルーク？ 気をしっかり持ちなさい」

優しくも凜とした声に、微睡みかけていたルークの意識は覚醒する。視線を動かすと、扇子を手に持ち、細身のドレスを身につけた女性が、自分の隣に立っていた。

「は、母上……………」

それが母だと気が付くのに、僅かな時間を要した。

緩く巻かれた、柔らかな髪は自分の髪よりも色素が薄い。

いつも微笑んでいる表情が、そこにはなかった。

パチリ、と扇子が閉まる音が、ルークの耳を叩く。

「あなた、全部、聞かせていただきましたわよ？」

上目遣いに夫を睨み付ける彼女は、口元を扇で隠す。

ルークは母の言葉に、最初から見てたのか、と恨めしく瞳を閉じた。

撃たれる前に、出てきてほしかった。

「あなたが《人形狩り》に資金を流していたのも、アークを疎まし

く思っていたのも、ルークが反人形狩りの《イン・ギア》とやらに陰ながら支援していたのも、全部、知っていましたよ?」

見透かすような彼女の視線に、街長の額に脂汗が滲み始め、手から拳銃が落ちる。

その音はルークの耳にも届いた。

「やはり、父はあなたを見誤っていたんですね」

ほう、と嘆息する母の前に、漸く動けるようになったルークが庇うように立つ。

ポタポタと伝う血が、絨毯に点線を描いた。

「ルーク、無理はいけません。ここは母に任せて休んでいなさい。もうすぐ、お医者さまがいらっしゃるわ」

「そこまで分かっていたなら、もっと早くに出てきて下さればよいのに……………」

「お医者さまは保険です。ルークほどの剣士ならば、あれ位は避けられると思っていたのだけれど……………」

「無理です」

息子を過大評価しすぎだ、とルークはふらつく足を叱咤しながら、苦笑する。

「あなたには、この家から出ていたっていただきます」

「！？　だが、街長は……………」

「ご心配なく」

扇を扉に向け、瞳を細める母を見て、ルークは青ざめた父を睨んだ。狼狽えるように、街長、という職にしがみ付こうとした夫の言葉を、彼女はピシヤリと遮る。

この街の長は、選挙などではなく、代々一つの血筋から選ばれる。ルークの家庭において、その血筋を引いているのは、母の方であり、父は入り婿であった。

よって、一番権力があるのは街長である父ではなくて、母なのだ。

「街長は責任を持って、ルークが引き継ぎますわ」

「母上。それも無理です」

「お黙り」

「……………はい」

彼女には誰も勝てない。

「荷物は纏めさせておきました。車を一台さしあげますから、好きな場所にお行きなさいな」

母が言い終わると同時に、使用人の男が二人、街長室に走り込んできた。

間髪入れずに父の両脇を掴んで、部屋から引きずりだす彼らを、そして父の叫びを、ルークは茫然と眺めていた。

最後に、父が何を言っていたのかは分からない。

しかし、ろくでもない事だったのだろうとは予想が付いた。

「…、……………ふう」

辛そうに息を付いたルークの肩に、慈しむような母の手が添えられる。

「ごめんなさいね、もう少しのしんぼうだから」

「大丈夫ですよ、これくらい」

笑いながら、ルークは自分の限界を誤魔化していた。

出来る事なら、今直ぐにでも意識を失いたい。

しかし、そんな事をしたら、母がこれ以上に傷ついてしまうかもしれない。

意識を失わないように、そんな事を考えながら、ルークは座り込む。

その時、丁度、半開きになっていた扉が、ゆっくりと開いていつているのが見えた。

余りにゆっくりとした、その速度にギョツとして、ルークはぎこちなく動きをとめ、扉を凝視する。

「……………にい、さま」

「アーク!？」

ずるずると、足にシーツを絡ませたまま歩いて来たのは、ルークに良く似た髪質の、表情に乏しい少年だった。

ルークより母よりの色の髪は、もともと跳ね気味であったのに加え、寝起きだったからか、更に跳ねている。

「ん」

差し出されたシートだったが、ルークはただ受け取り、使い道に悩んだ。

何の意図が働いたのかが分からない。

「痛い」

「ん、ああ」

単語を呟いただけだが、自分に尋ねているのだろうとルークは解釈した。

そのアークの手が、シートの端を掴み、ルークの肩へと向かう。

「ん」

ルークの肩の向こうに伸ばされた手はシートの端を離し、脇から伸ばした手がその端を掴んで引いた。

そうすると、丁度、傷口にシートが巻かれたような形になる。

「そう、そうよね。怪我をしたら包帯を巻くのよね」

「ん」

心なしか満足した表情のアークは、そのまま、うずくまるようにして、ルークの足に頭を乗せる。

枕代わりされた足と、いきなり眠りだした弟に、ルークは驚きつつも苦笑した。

あの日から、何時もそうだ。

ところかまわず眠りだすくせに、ルークがいると必ずその近くまで移動してきて、また眠るのだ。

なので、兄弟の寝室は幼いころと同じく、同室になっている。

「早く、一人で眠れるようになれよ」

外見は十三歳に成長した、六歳前後の弟を愛しく思いながら、ルークはその頭をなでた。

それから直ぐに医者が到着したのだが、アークが眠っていたおかげで、診察から治療までを、そこですませる羽目になった。

「…………無理しないで」

「い、え。弟を起こしたくないんです」

「でも、痛いでしょう?」

「……………はい」

そんな会話が行なわれていた事を、アークは夢現つに聞いていた。

しかし、記憶には残らない。

もう一度、アークは夢を見るために目を閉じた。

.

第五話：拾う齒車 切り裂き屋

街の中で、最も人通りのない路地にて、異様それは、下に通路の通った橋の上に座り、ぼんやりと空に浮かぶ、黄金の月を眺めていた。顔を隠す長い前髪は、瞳を刺すような金色で、適当に切り捨てられた後ろ髪より僅かに短い。

前髪で、十分に顔は隠れているというのに、赤い布が目隠しのように幾重にも巻かれていた。

しかし、その隙間から片目だけが覗いており、その瞳の色は青い。

「まゝじよが現れ、言いました」

よく見ると、それは小さく唇を動かし、何かを呟いていた。

それは歌で、童謡のようだったが、聞いたことはない。

「『可愛い貴方を人形に』。金のまゝじよが言いました」

歌う気などまるでない歌声は、虚ろに路地にこだまする。

「人形、箱の中につめ、まゝじよはお家に帰るのさ。もっと

大きな玩具箱、人形たくさん持ってきて遊んでしまつて、また遊ぶ。人形フラフラ踊つてゐる」

ぶらぶらと足を動かしながら、それは歌を続ける。

「ある日玩具の箱が、開かなくなつて、人形たちにはゆっくりと箱の蓋を開けました。まじよが、ずっと遠くからこちらに走ってきています、人形びっくりしましたが、蓋が閉まらず溢れだす。そしたら箱が揺れだして、ここからみんな、落ちちゃった。下には釜戸がありまして、箱ごと皆、燃えちゃった。だから、まじよは泣いちゃつて、涙で炎が消えました。そこから焦げた人形があ、一人這い出て言いました……」

その空気のような歌声が、止まった。

月を見上げて、口の端を上へと上げる。

「まじよさん、貴方は魔女ですよ。女神じゃなくなつて、魔女でしょう？」

人形しゃべつて逃げつた。魔女が恐くて逃げつた。

くすくすと、笑い声を上げながら、それは月に向かって手を伸ばす。月を掴みたい、というよりは、誰かに手を掴まれるのを期待しているかのような手の形だった。

月の光すらも眩しそうに、それは瞳を細める。

「燃えちゃった〜 ま〜じよも一緒に燃やされて〜、逃げた人形、ただ一人〜、ユラユラフラフラヨタヨタと〜、魔物の街にやってきた〜、ま〜じよは燃えて、にんぎよも燃えて〜、燃やした炎は燃やした炎〜」

ぐっ、と握り締められた手の平は、直ぐ様橋の柵に叩きつけられる。口は相変わらず笑みの形のまま、瞳の青だけが、ギラギラと光を放っていた。

「魔物は、みんな、狩ってやるよ……僕は大丈夫さ。人形だもの。丈夫だから、大丈夫だよ。あんたが作った人形だもの、魔女さん」

月に話し掛けるそれは、にこり、と微笑んで、橋の上から飛び降りる。

六メートルほどの高さから、それは音もなく着地し、それはゆったりと歩き始めた。

ユラユラフラフラヨタヨタと……………。

酔いが回っているのか、少々頬に朱色のさした女性が、裏路地を歩いていた。

露出度の高い上着とミニスカートは、彼女によく似合っている。

「そこのお嬢さん」

微酔い気分でいた彼女は、小さく微笑んでそちらを向いた。

そこにあるのは、暗い路地裏と、今し方、声をかけてきたであろう誰かの手の平。

まるで人形のように形のいい白い手は、その先にある秀麗な顔立ちを想像させるのに、十分であった。

「さあ」

そう言っで手はさらに彼女に伸ばされる。

そして彼女は……

十 十

翌日、新聞を開いたゼオンは、表情を陰しくし、下唇を噛んだ。

また女性が一人、ジャックの手によって殺されてしまった。

《人形狩り》は人形を狩り、《切り裂き屋》は人間をかる。

だったら《イン・ギア》はどうすればいいというのだろう。

人形狩りを阻止するのは《イン・ギア》

多くの人間の協力がなくては存在できないのも《イン・ギア》

ジャックは現れてから、二週間で、すでに十数人もの女性を手にかけている。

町中の人間を殺しきるかのようなスピードだ。

しかし、街の住民はただ恐れるだけで、何もしない。

何も。

はあ、とため息を付いて、ゼオンは新聞を畳む。

「どうして、こうなるのかな」

その呟きは、誰にもとどかない。

額縁に飾られた金の女神は、そんなゼオンを、優しい微笑で見つめていた。

第六話：拾う齒車　白い人形姫

無機質な壁に囲まれた、それでいて広いその敷地は、青い芝生と多彩な花々によって彩られていた。

その中で、白髪に銀の瞳の女性が、これも白い上呂を片手に、バラの手入れをしていた。

結われた髪と、肩の露出した黒の上着には、大きめのバラの花の飾りが付けられていて、どこかのお姫様のようだ。

しかも、その髪と瞳が作り物のようで、人形に見えなくもない。

彼女は、日の光が苦手だった。

なので、今は日が沈んで間もない、といった頃だ。

「ししょー」

「あ、ティオ！」

丁度、門に様子を見にいらしていた時、その門の向こうから、赤毛の一見女の子に見間違えそうになる少年が走ってきた。

後ろには、黒い短髪の人形師で《イン・ギア》の、スゴウが付いてきている。

「今日はゼオンじゃないんだ」

「よ、ツエナ。今日はゼオンじゃなくて俺。新しい技手の話してきた。ガゼローフいるよな」

「うん。きつと夕食作ってると思う。食べてく？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

そう言いながらニカリ、と笑って、スゴウは家の中に入っていった。

「さて、じゃ、やろっか」

「はい、よろしく願いします！」

白い上呂を、花壇を囲う煉瓦の上に置いて、ツエナはテイオに微笑んだ。

テイオは腕を捲り上げ、構えをとる。

清楚可憐に見えるツエナだが、実は武芸の達人であり、それを活かしてテイオの師匠などもかって出る、戦姫であった。

この場所以外には、花屋にいくぐらいしかないので、街の中では余り有名ではない。

そうでなくとも、最近はジャックの出現で、若い女性のツエナは夜間出歩く事ができない。

もし、誰も止めなかったら、夜の散歩を続けていたかもしれないが、「君が出ていったきり帰ってこなかったら、不安と絶望に押し潰されて、死ぬから……」

などと言われてしまつては、いくらマイペースなツエナも従わざるを得ない。

「もう少し踏み込んでも大丈夫。……うん、そうだね、円が乱れないように。そうそう、そんな感じ」

「うりゃっ!」

テイオの繰り出す、素早く流れるような手の平や蹴りを、同じようにして交わしながら、ツエナは優しく指導する。

「うん。じゃあ、そのまま、流れを変えてごらん。足の運びに気を付け……あ」

「うえ……と、ととっ!? うひゃあっ!」

ツエナが注意を促した瞬間、それを聞き終わるか否かの時に、テイオが左の足につま付いて、見事に転げた。

下は芝生なので、無傷ではあるのだが、痛い。

「いてて」

と、テイオが正直に口に出して言うと、ツエナがテイオに手を貸して、少し休むことになった。

始まってそんなに時間は経っていないが、毎回気紛れに休憩するので、ツエナもテイオも気にしてはいないようだ。

ぼんやりと、様々な花の植えられた園を見ながら、二人は座り込む。

「ししょー、ししょーってガゼローフさんの事、どう思ってるんですか」

「え？ うん、お料理作るの上手いなとか、髪の毛の結い方上手いなとか？」

「髪、結ってもらってるんですか………？」

「うん」

キョトンと首を傾げる彼女は、果てしなく純粹だ。

友情から色恋ざたに発展していくタイプだろう。

「後は、そうそう、何かに付けて、『死ぬ』って単語を使ったがるんだよ。駄目だよっていうのに」

「それは知ってます」

ガゼローフという人は、そういう人なのだ。

絶望しきった暗い表情で、思い付きのように死のうとする、一層愉快な人なのだ。

ただ、止めてやらないと冗談でなく、本気で自殺を遂行するのがたまにきず。

その時は、ゼオンとスゴウの処置によって一命をとりとめたが、彼らが居なかったら、確実に死んでいただろう。

「ていうか、そもそも何で、ししよーの家にいるんですか」

少しばかり尖った物言いに、ツエナは苦笑して聞き返す。

「いたら、駄目かな？」

「いえ、そういう訳じゃなくて……………ししよー、女の人だし、ガゼローフさんは男の人だし……………」

「ああ、そういう事」

後半、口の中でもゴモゴとどもったテイオに、ツエナはぼん、と手

を打つ。

彼女自身、そしてガゼローフも気付かなかった意見だ。

そんな事、一度も考えなかった。

「たぶん、大丈夫だよ。私、強いし」

「……………ああ！」

なぜかそこで納得するテイオ。

確かに、一本背負いか、巴投げでもかまして、事無きを得そうだ。

「それにガゼローフさん、そういう事、考えるよりも、もっと考えることがあるから」

「考えること？」

「自分が絶望する要素とか……………」

「暗ツツ！」

「そういう人だもの」

笑って答えるツエナは、ただその意味だけで、その単語を使ってい

る。

そこに恋愛感情はない。

そもそもツエナとガゼローフが出会った切っ掛けは、夜の散歩を最中、ツエナが川を放流していたガゼローフを助けた事に始まった。

川の上流から、ずっと流れてきたようで、あちこち傷だらけで瀕死の状態だった。

話を聞いてみると、街よりも（死ぬ確立の高い）山の方が自分にあっている気がして、山の洞窟で暮らしていたところ、洪水と土砂崩れのダブルパンチにあい、川を流れていたそうだ。

何とも哀れな話である。

その前から、自殺願望的感情は天性的にあっただけ、はじめの頃は本気で困った。

凄まじいまでの被害妄想に、ゼオンすら失笑していた。

そんな彼と、対等に会話してみせたのがツエナである。

彼女のおかげで、ガゼローフが優れた人形師である事が分かり、彼が《イン・ギア》に協力してくれるようになった。

ツエナが居なければ、凄腕技師と鬼才人形師のタッグは見られなかっただろう。

「おゝい、ツエナ、テイオ、飯だつてゝ」

「はゝい！」

リビングの窓から顔を出したスゴウの呼び掛けに答えて、ツエナが立ち上がる。

続いてテイオも立ち上がり、ズボンに付いた葉っぱを払う。

余り稽古はできなかったが、いつもこんな感じだ。

ゆっくりとそれでも強くなっている自分を感じながら、テイオは、リビングの扉を開けた。

そこでガゼローフが持っていた包丁を叩き落としたスゴウを見て、テイオとツエナは苦笑して席に着いた。

そこにはガゼローフの絶望仕切った表情からは想像も付かない、華やかに色とりどりの料理が、美味しそうな香を漂わせていた。

第七話：拾う歯車 陰鬱人形師（前書き）

今までとは少し違う感じのキャラです。苦手な人がいるかもしれません。

第七話：拾う齒車 陰鬱人形師

ツエナに笑って答えてから、スゴウは高床式の別荘のような家の中に足を踏み入れた。

いい匂いと、何かを刻む音が聞こえる。

ガゼローフが夕飯の支度をしているのだろうと、スゴウは迷う様子もなく、左に曲がり、リビングに向かう。

案の定、ガゼローフが鬱々とした表情で野菜を切っていた。

補足しておくが、別に料理を造るのが嫌な訳ではない。

彼の表情は、常にこれだ。

「よう、何作ってるんだ？」

「…………野菜、サラダ」

「へえ。今日、飯食わしてくれるってツエナがいったぜ、よろしく」

「…………不味かったら絶対言って。死んで詫びるから」

「ぜってえ、言わねえ」

こういう奴なのである。

テイオよりは短く、スゴウよりは長い黒髪は表情をより暗く見せる為にあるようで、紫闇の瞳は、地獄を見てきたかのように輝きが無い。

死んだ魚のような目、とても言うんだろうか。

「……………できれば、料理をテーブルに置いてほしいな」

ぼそつと言った言葉が聞き取れず、スゴウは

「あ？」

と、常のしかも低い脅すような声で言ってしまった。

はっとしても遅い。

「ごめん。自分の仕事を人に頼むなんて……………自分の厚かましさを恥じて、死なせていただき……………」

「うおおおっ！！ や、やめろっ包丁、向けんのは、野菜にだろっ！！」

俎板の上に手を乗せ、包丁を振り上げるガゼローフを必死に止め、スゴウは言われた通りに料理をテーブルへと並べる。

ある種の脅しと化している彼の自殺的願望だが、あれは紛れもなく彼の本心だ。

止めなくては、彼は本当に死んでしまっただろう。

最近聞いた、ガゼローフの過去に、それは由来している。

「義手の話………飯食ってからにするか？」

「どっちでも………」

「じゃ、後で」

希望と言う文字を、彼は過去に置いてきた。

『病魔に殺され病死するより、運命と心中して老死するより、同胞に殺され他殺されるより、誇り高き自由な自殺を選ぶ』

それが彼の歪んだ思想だ。

どんな過程を経てそのような思想に行きたったのかは分からないが、ガゼローフが見た目よりも長く生きているのは、誰もが知っていた。

それはガゼローフが、《人对機戦争》の詳細を知っているからである。

それはまるで見ていたかのような描写で、彼は、何度も死にかけながら語った。

事あるごとに自殺しようとするのは、そのためかもしれない。

しかし、人対機戦争の事実を知っているのは、何もガゼローフだけではない。

ゼオンも、その戦争のことは知っていた。

彼の話によると、彼が生まれたのがそれより少し前のことらしい。

それにスゴウも、師匠的存在だった祖父から話には聞いていた。

今から、八十年か、それよりも前の話だ。

「おーおい！ 飯だぞー！」

テーブルに料理を並べ終えて、スゴウは部屋にある、上に押し上げるタイプの窓から、ツエナとテイオに言う。

「はい」

いつも通りにそんな声がして、スゴウは微笑んで窓を閉め直す。

「さあ、先に座ってようぜ、ガゼローフ」

笑顔で振り返ったはずのスゴウの表情が固まった。

わなわなと震える手に、未だ包丁を持ったまま、ガゼローフは聞き捨てならない分の羅列を淡々と口にし続けている。

「な、なんで……？　なぜそんなに僕を信用するんだ。味に自信なんて無いのに……美味しい事を前提にしてるんだ！　そ、そそ、そんな、自信ないよ……あぁっ！」

「ガゼローフ！」

「不安だ！　胸が張り裂けそうなほど不安なんだ！　この不安に耐えきれないので、死なせていただ……」

「止めろつつってんだろぅがぁぁぁっ！！」

スパアンツ！

と叩き落とされた包丁。

そのタイミングで、ツェナとテイオが、リビングに入ってきた。

二人とも、スゴウとガゼローフのやりとりに小さく苦笑をもらしただけで、すぐに席に着く。

それほど、この光景は日常的なものだと言う事なんだろう。

しかし、毎度毎度付き合わされるスゴウとしては、こんな自己主張はやめてほしかった。

「うん、今日もお料理美味しいよ、ガゼローフ」

ニコリと微笑んだツエナの反応に明らかに安堵して包丁を仕舞にキツチンの裏に向かったガゼローフに、スゴウはもう笑うしかない。

「本当、何なんだよ、あいつは」

疲れてため息を付いたスゴウに、ツエナもテイオも笑って答える。

しかし、残念ながら二人ともスゴウの質問には答えることが出来なかった。

そう。

ガゼローフはそんな奴なのだ。

第八話：填まる齒車 リーダーと街長

朝刊を手にした、金髪碧眼の青年ゼオンは、大きくため息をついた。

原因は切り裂き屋の記事だ。

また被害者が出たらしい。

「……………何だってこんな事を」

悲しそうに瞳を伏せたゼオンは、新聞を畳むと、出掛ける準備を始めた。

今日はインギア集会が開かれることになっていたはずだから。

+

+

朝の、それほど早くない時間帯に、氷のような瞳で、若街長のルークは身仕度もそこそこに屋敷を飛び出した。

事は急を要する。

護身用に剣を携え、ルークは辺りを見回しながら、街の通りへと辿り着いた。

朝の割りには人が多い。

十三・四の少年を探して、ルークは通りを駆ける。

「アーク……！」

今朝、屋敷から姿を消した最愛の弟の名を、ルークは祈るように口にした。

+

+

「ひいひいゝんっ!!」

「ま、待ってよ、テイオ!」

路地を子供二人が駆け抜けた。

先に行くのは、少女と見紛うほどに可憐な、赤毛の少年テイオ。

後を追うのは、名の通りに白い肌で黒髪の少年ユキ。

「ううゝ……………なんでよりもよって、あんなところに行っちゃったかなあ」

テイオの後を追いながら、ユキは朝刊を見なかったことを、激しく後悔していた。

本来なら、今、この街にある抜け道や、秘密の通路を教えて貰えていたはずなのだが、本日最初の抜け道を抜けた瞬間、思いもよらぬ場所に抜けてしまったのだ。

そこは《切り裂き屋》の犯行現場。

血の染み込んだその場所を直で見てしまったテイオは、奇妙な悲鳴とともに、ただ今疾走中だ。

しかし、どこをどう走ったのやら。

テイオを見失ったら、自力で帰れるか怪しい。

「テイオ待って………って、あ！」

その瞬間、テイオの姿が、煉瓦の壁と建築物に区切られた曲がり角へと消える。

見失う訳にはいかないと、ユキは走るスピードを上げ、壁に手をつけて遠心力も加え、曲がり角を曲がった。

しかし、その瞬間、悲劇は起こった。

「……………あう」

「きゃんっ！！」

「フギユルっ……………ぐえっ！？」

それはユキが角を曲がった瞬間だった。

よりスムーズに曲がるために、手を壁にひっかけ遠心力を利用したユキに、テイオの背が、正面から衝突した。

ユキに倒れかかったテイオも、相当の勢いで誰かとぶつかったらしく、彼らの正面には、涼しさを思わせる薄い青の長髪少年が倒れて

いる。

仰向けに寝転がっているとも取れる彼は、整った顔立ちをしていて、しかし無表情だった。

「うう……………えっと、大丈夫？」

下敷きになったユキと、ムクリと起き上がった少年に対し、テイオが声をかける。

頭を押さえて唸っているユキなどお構いなしに、少年はゆっくりと立ち上がる。

ぼんやりと空を見上げた少年に対し、テイオとユキはその少年を見上げた。

難なく立ち上がったところを見るかぎり、それほど大きな怪我をしたようには見えないが、応答がない。

「あのう……………」

と、テイオが再度、声をかけようとした瞬間だった。

「いたーっ！ いたいた！ こっちよ！」

若い女の声が裏路地に響く。

そして彼女は《人形狩り》だろう。

《イン・ギア》ならば、あんな風に叫ぶことはない。

「ヤバッ」

「逃げるよおっ！」

「う？」

ぼんやりとつつ立ったままの少年の両脇を掴んで、テイオとユキは声とは反対の方向へと走った。

後ろから、数人の足音が聞こえてきた。

「え、え？ テイオ、どどど、どこ行くの！？」

道など知らないユキは迫る行き止まりの煉瓦壁に突っ走る。

テイオがスピードを緩めないの仕方がない。

もう、衝突する事を覚悟してユキが目を瞑る。

と。

「か、絡繰り扉ッ!？」

とある一角の壁が、くるり、と表裏を入れ替え、壁の向こうにある敷地を抜ける。

しかも扉を抜けた先は、緑に隠されたトンネルのようになっており、まわりの植物と相まって、もし壁の上から見られても、分からないようになっている。

しかし、そこは明らかに他人の家の敷地だった。

「て、テイオ……通っていいの？」

「うん！　ボクの師匠のお庭だからね」

「し、師匠!？」

そう言っている間にも、緑のトンネルは終わりを告げる。

そうして表れるのは、白い、高床式の別荘のような家屋。

「いらっしゃい、テイオ。二人はお友達？」

その場所で花に水をやっていた人形姫が、小首を傾げる。

白い髪、白い肌、白い瞳。

テラスのわざわざ日陰に入って、そこからでない彼女は、黒い薔薇をあしらった、一見ドレスのような衣服を纏っており、まるで彼女自身が飾りモノのように見せていた。

「お友達だよ！　ちょっと隠れさせて！」

「いいよ。もう少ししたら、スゴウとゼオンも来ると思うからさ。ゆっくりしてって」

微笑んだ彼女に軽く会釈をして、そうして、ユキは、テイオに引きずられるようにして、家の中に足を踏み入れた。

.

第九話：填まる齒車 顔合わせ

「あっ」

「……っと、すまない。よそ見をしていた。怪我はないか？」

「いえ、こちらこそぼんやりしていて…すみません」

人も増えてきた街角で、二人の青年が肩をぶつけた。

金髪碧眼で、《イン・ギア》のリーダー・ゼオンは、かなり急いでいたであろう、流れるような、それでいて濃い青の髪的青年を見て、瞳を見開く。

そして、相手側も、鋭い瞳を丸くして、ゼオンを見た。

「おまえ、《イン・ギア》の…」

「街長さん……」

それほど見知った仲である訳ではないのだが、互いにそれなりの浅からぬ繋がりはある。

初対面であっても、すぐにそれと分かる程度には、互いを知っていた。

「あの…お急ぎのようでしたか？」

額に薄く汗を滲ませた、若街長・ルークの表情に切迫したものを感
じ、ゼオンは尋ねる。

とたんにルークはゼオンの肩を強く掴んで言った。

「十三歳くらいの男の子を見なかったか？ 薄い水色の髪で、外に
跳ねるくせがあるんだ。目はそれよりも、もう少しだけ濃い色をし
ている。ぼんやりしているのが特徴で、今日は確か、青系の服を
着ているはずなんだが……」

「…お、落ち着いてください、街長さん。分かりました、探して
みますよ」

「あ………すまない」

ゼオンの肩を掴む力を、知らずに強めていたルークは、けおされた
ように目を丸くしているゼオンを解放する。

「大切な弟さんなんですね」

「………ああ」

当たり前だ、と呟いて、ルークはまた人込みのに消えてゆく。

小さく微笑みながら、ゼオンは知り合いの家へと歩を進めた。

白い人形姫の住まうそこに、まさか、件の少年がいるとも知らずに。

+

「おおぅ……随分可哀想なガキンちよ連れてきたじゃねえか」

「可哀想とか言わないでよ！ 失礼だなあ」

ユキとテイオに挟まれる形で、無表情にぼんやり座っている少年に

対し、スゴウが言った一言は、本当に失礼極まりないものだった。

「本当、失礼だと思う……でも、その発言の裏に隠された意味を知っているだけに、あまりにも悲しい。悲しすぎるから、今、ここで死……」

「待てやゴラあああっ！」

ふらつと現われたガゼローフの行動に絶叫しながら、スゴウは彼にラリアットを食らわす。

飲み込もうとしていた、トリカブトのカプセルが床に散らばり虚しく転がる。

啞然とした様子のユキとは対照的に、少年は無表情だ。ピクリともしない。

「それよりガゼローフさん。隠された意味って何？」

すでに軽く流せるまでに慣れたテイオが、ガゼローフに尋ねる。

彼はケフケフ言いながら、鬱々とした表情のまま答えた。

「彼の頭はおかしい」

「…………えええっ！？　ちよっ、ガゼローフ！　馬鹿じゃない！？　本人の前でなんて事を！！」

「どうやら悪いことをしたようだから今すぐ死の……」

「拾い食いすんなあっ！！」

余りに直接的すぎる発言に、思わず拾った薬を再度、床にばらまいてしまったティオは、バシリ、と彼の頭を叩いた。

叩かれたガゼローフは、控えめに傷ついた様子で、ティオがばらまいてしまった、もとは自分の持ち物であった薬を拾い、口に入れようとした。

しかし、それはスゴウに阻まれる。

「君は、どうして止めに入ってくるの？　いつつもいつも」

「当たり前だろうが！」

「当たり前なんだ。それはいつから？」

「生まれたときからだ、馬鹿かお前は！」

「僕の生まれた所では、人を殺して生きていたけれど……」

「は！？」

「……」

スゴウに掴まれた手を、振り払うようにして振って、ガゼローフは相変わらずの表情だ。

と、そこにツエナが人数分のカップと、二つのソーサーを持ってきた。話が聞こえていたらしい彼女は、小さく微笑んだまま、テーブルの上にお盆をのせ、ガゼローフの事を話し始める。

「スゴウ、ガゼローフの言ってる事は、仕様のない事なんだよ」

「仕様のない？」

カップに紅茶を注ぎながら、ツエナはユキの言葉に頷く。

「そう。仕様のない事。ガゼローフは、そういう所に、そういう時代を生きてたんだから。話に聞くしかない僕やスゴウ、テイオやユキ、その男の子とは違うんだよ。笑っちゃうだろうけど、ガゼローフ、実は……」

「あ、遅くなりました。皆さん、すみません」

ツエナが何かガゼローフに関して重要なことを言おうとした瞬間だった。

息を切らせた様子はないが、急いできたのが分かる物言い、ゼオンが扉を開ける。その顔を見て、ツエナは言った。

「ガゼローフはね、ゼオンよりも年上なんだよ。十歳くらい」

「……はい？」

話の流れを掴めなかったゼオンだけが、キョトン、とした表情で首をかしげた。

ユキは、ゼオンとガゼローフを交互に見る。

ガゼローフがゼオンより年上だというのは理解できる。しかし、十歳も年上だとは思えなかった。

「ゼオン、って何歳？」

恐る恐る、といった感じで尋ねたのはティオだ。

「歳、ですか？ ……ええと」

考えるように顎に手を当てたゼオンの代わりに答えたのはスゴウだった。

「コイツは一応、機融人だからなあ……人より面積も多いし……見た目の三・四倍ってトコだろうな」

「さん、よんばい？」

「そつだ。何回も言わせんなよ。……だから、七十か、八十の間だろ」

「えええええっ！？」

驚愕しているテイオとユキに相変わらずの笑顔を向け、ツエナは彼らに更なる衝撃を与えた。

「だから、ガゼローフは、八十歳から九十歳くらいの間ってことだよ」

「マジでか！？」

その事実にはスゴウですら驚いた。

この、二十代前半にしか見えない男が、まさか九十年も生きているとは思えない。

「え。え？　じゃあ、ガゼローフは機融人なの？」

少しばかり動揺しているテイオに、ガゼローフは首を左右に振る。

「違う。僕の体に機械である場所はないよ。けれども、一つ、生成機械が心臓近くに取り付けてあるんだ」

もとより暗い表情をさらに暗くして、ガゼローフは呟いた。

「そのせいで、普通にしてても死ねないんだけどね。……いつそのこと、今ここで、心臓を突いて死のうか」

「やめろよ。で？ その機械つてのはどんな奴だよ」

傍らに転がっていたペンを手に取ったガゼローフを、やんわりと止めて、スゴウは話をすすめる。

名残惜しそうにペンを置いたガゼローフは、機械の説明をしだす。

「僕の持っている生成機械は、十分な水分に、新しい細胞の種のようなものを包んで、血液中を流す、と言うものなんだ。そして、老化し、衰え、死んだ細胞の代わりに、それが立ち代わる。細胞の限界分裂数が無くなったから、ボク自身は衰えたりしない。水分が細胞に十分に含まれていれば、細胞自体が長生きするからね。最初の時点から、細胞自体が長く生きれるようになってる」

「へえ……すごいじゃないですか！」

素直に感心して瞳を輝かせた雪に、ガゼローフはまたもや首を左右に振った。

「すごくなかない。所詮失敗作だよ。持ち主の意志にそぐわない機械だなんて」

「……………」

一瞬だけ場が静まった。しかし、それは白い声で、すぐに掻き消える。

「ガゼローフ。そういう事は、世界中の皆が、君の事を忘れてしまつてからいいなよ。僕はね、君に会えて毎日、楽しい思いをさせてもらつてるよ。君は、僕と違って、太陽に愛されてる人なんだから」

柔らかい光のような言葉に、ガゼローフが驚いたような隙だらけの表情になってツエナを見る。

もしかしたら感激してるのかもしれないが、よく分からない。

「あの……今日の打ち合せは……………」

この場所にきてから、よく分からない展開に巻き込まれていたゼオンが、苦笑しながら部屋を見回し、ある一点で、瞳を見開いた。

ちよこん、と姿勢良く椅子に腰掛けている、水色の髪の少年。

「スゴウ、あの子は……？」

「あ？ ああ、テイオとユキが路地裏で拾ってきたんだよ」

「あの子は……スゴウ、一緒に来てください！」

「はあ？」

いきなり慌てて、ヒョイツとぼんやりした様子の少年を抱え上げたゼオンに驚きつつも、スゴウはその後ろについて走りだす。

「ああっ！ ちょっと待ってよ！」

ほぼ条件反射でスゴウを追っていつてしまったテイオに、ユキはついていくことが出来ず、ぽつんと、ツエナ邸に残されてしまった。

「花屋まで、送っていくから」

「うん」

初めてガゼローフの優しさに触れながら、ユキは小さく頷いた。

「貴方が、家の息子を助けてくれたテイオちゃんね？」

「ひゃ……………あ、はいっ」

「お前、緊張しすぎ」

「貴方はもう少し、緊張してくださいよ」

街長邸の豪華な居間で、《インギア》の三人は、街長の母親である、セリスと、和やかとは言えないが、話をしていた。

緊張のあまり、声が裏返ってしまっているティオは、目線がさ迷っていて、瞬きの回数が異常だ。

なぜ、そこまで緊張しているのやら……。

ニコニコと笑顔のセリスを前にして、ティオは気押されてしまっているのかもしれない。

感覚としては、花屋の彼女に似ている。

着物であるかドレスであるか。

容姿などが、瓜二つと言うほど似ている訳ではないのだが、目が少し似ているような感じもする。

「すまない、待たせてしまったな」

「わっお」

「！」

今まで街に居たのだろうか。息を切らした様子で、ルークは部屋に現れた。

ゼオンが今日の集会に遅れてやってきたことを思い出してか、スゴウが半眼になって苦笑する。

それとは反対に、ティオは更に体を強ばらせた。しかし、瞳は輝いている。

「お前、本当に探してくれたのか…」

「いいえ。本当に見つけたのは、この子ですよ。街で会ったそうです」

「そうか……」

母親の隣の椅子に腰掛けながら、ルークはティオに視線を向ける。

「弟を保護してくれて有難う。心より感謝する」

深く頭を下げるルークに、ティオは、口をパクパクさせながら、首と手をブンブンと振っている。

その必死の形相に、スゴウは鼻で笑って足をくむ。

ゼオンだけが、キョトンとした表情で二人を見ていた。

「うふふ……ティオちゃんはうちの息子が好みなのかしら？」

「ブウウウ

ッ!？」

「テ、テイオ？」

「あは、はははっ!！」

「……………」

部屋の中が阿鼻叫喚。

テイオの反応が尋常じゃない。その前に、セリスが余りにも直球でテイオに投げすぎたのだろう。

テーブルに突っ伏してしまって、頭から煙が上がってる。

「て、テイオ？ あ、僕……………」

「おゝ。後は俺に任せろ」

「……………任せました、よ？」

「信用ねー」

フラフラと歩くテイオに肩を貸しながら、ゼオンが使用人に案内されながら出て行く。

それを見送り、扉が閉まり、足音が遠くなってから、スゴウは話を切り出した。

「さっそく、お宅のおチビちゃんの事、聞きたいんだけど」

ニヤツと笑ったスゴウに、ルークは一度目を瞑って、話し始めた。

「まあ、なんとかなんだろ。アフターケアがなってなかったんだよな」

「感謝する」

真夜中も真夜中な時間に、スゴウとルークは、フラフラと街を歩いていた。

アークの状態に付いて、細かく説明していたら、こんな時間になってしまった。

名目はルークがスゴウを送る事になっているのだが、この場合はルークが勝手に付いてきた、と言う事になるのだろっ。

「弟の事については感謝している。しかし……」

「説教すんなら帰れよ。これは俺の問題なんだっつ」

「だからと言って、一人でジャックとやりあうなど……」

「なめんなよ。俺の眼」

「……そこまで言うのなら、引き止めはしないが」

先日受けた傷の痕に触れながら、スゴウは顔をしかめ、僅かに下る道の向こう、その上にかかる橋を見る。

道にかかる橋。その柵に腰掛けている人影。

「居たな、今日も」

「橋の上か？」

「見えんのか？」

「目はいいだ」

それを言うなり、スゴウよりも早く駆け出したルーク。

腰の剣に手をかけ引き抜こうとした瞬間だった。

「君は、女の子？」

「!？」

「髪長いけど、男の子か……つまーんなあい！」

「先走んな、ルーク！」

信じられないスピードでルークに近付き、抜刀を阻止したそれは、スゴウの登場により剣から手を離す。

「ジャック」

「やあ、この間の人。あの時はごめんね？ 君が女の子を庇うから

……」

「庇うに決まってるだろ。今日はあん時のお礼参りだ！」

ぐつと踏み込み、ジャックに手を伸ばしたスゴウだったが、それを逆手に取られ、懐に入られてしまう。

助ける間もなく、まさに弾丸のような突きを見回れたスゴウは壁に強かに背を打ち付ける。衝撃を吸収する事も出来なかった彼は、気力で立ち上がったが、それ以上何も出来ない。

「……君は、どうする？」

赤い布に隠された顔は、口元しか見えない。その笑いに、ルークは今度こそ剣を引き抜き、ジャックに向けた。

「お相手、いたす」

悪魔と聖騎士の対峙のような一場面。

夜明け前。誰もが眠っている時間、静かにそれは開始された。

どちらが勝のか、誰にも分からない。

.

第十話：填る齒車 私と貴方

当たらない。当たらない。

繰り出しても繰り出しても、双方の攻撃は当たらないし当てられない。

力量の差はない。ないからこそ、当てられない。

「……ん」

後ろに大きく退いたジャックが、顎に手を当て首を捻る。

「黒いお兄さんは、ただの人柄だっただけ……青いお兄さんはどうして僕にちょっかい出すかな？」

起用に片足でバランスをとりながら、金髪と目隠しの赤い布の合間から僅かに除く、青の瞳が、不思議そうに問掛ける。

それにルークは隠すことなく言っただけ。

「この街の人間を殺されては困るんだ。私は、ここの街長だからな」

腰に剣をくつつけるように構え、ルークはジャックを睨む。

ジャックは、図ったように間合いに入ってこない。

「へえ……青のお兄さんは街長さんなんだ」

「そう言った」

「だったらさあ」

顎に当てていた手を、笑う口を隠すのに使って、ジャックは小さくうつ向き。

「この街の女をさ、全員、閉め出してくれればいいよ。そうしたら僕は誰も殺さないから……一人ぐらいいは多目に見てよ？」

くすくす笑うジャック。

ルークは一瞬思考し、結論をだした。

「無理だ」

「何でえ？」

「大昔の戦争の影響で、住める場所など、ここ以外にはない。……」

あるとしたら、別大陸になる」

「んふふ……知ってる」

「！」

真面目に答えたルークを嘲笑うように、ジャックは体をくの字にする。

声を出さない笑い。

そして上げた顔に張り付いた表情は、やはり笑い。

「だから僕はここにいるのさあ。ここは逃げ場のない籠だからね…
うふふ」

「お前……っ」

「ここには全部揃ってる。僕がなしたい望みは全部ね！」

そして、指折り数えるようにつらつらと望みを並べる。

「女を一人残らず殺して、次に男。順々に、ゆっくり確実に殺してくんだよ。ジワジワいためつけた後に、魔女に捧げるんだ。そうして逃げた人形を少しずつ弱らせて、そうだな僕が手を下さなくても、勝手に死んでくれるようになるまで、ずうっと見てようかな。楽し

み」

「……理解できないな」

「温室育ちのおぼっちゃんには分かんないよ」だ。……ね、君は諦めていたものが戻ってくるんでしょ」

「？」

手をくるくると回しながら、ジャックは月を背にしてにやりと笑う。青い目が、まるで血が滲んでいくように、不気味に赤い輝きを放つ。ルークは思わず、後退さる。

「とぼけないで。君の弟だよ。嫌な父親もいなくなって、弟だって普通に暮らせるようになるんだよね？ いいよね、願いが叶って。……そこのお兄さんもだよ。一度は両目とも使い物にならないくらいに焼けたのに、機械の目を付けてずっとずっとよくなった。やりたい事はやってきたし、やれないことなんてないもんね！」

ゆら、と踏み出した足にすら、何らかの威力がありそうで、ルークは表情を険しくした。ここまで如実な恐怖を感じたのは、初めてかもしれない。

「でも僕は違うんだよ全然違う。君らの想像つかない事を体験して、想像つかないだけの思いをして、それで、ここにいるんだ。僕を止

めるなんて無理だよ」

うふふ、と笑うジャック。

冷や汗の伝う額に、ルークは手が震えていることに気が付いた。力のこもりすぎた腕が、悲鳴を上げている。

けれども、ここで動く別けにもいかなかった。

動いたら、殺される。そんな予感があった。

しかし、そんな時間も永遠な訳はない。

二つの金色が、ルークとスゴウの前で向かい合ったのは、一瞬での出来事だった。

「……………やめなさい、ジャック」

静かに言ったのは、《イン・ギア》のリーダー、ゼオンだった。

金髪で、目が青くて、優しく温かな印象を受ける、そのままの彼が、静かに言った。

金髪で、青い目をしていた、刃物のような、ジャックに。

二人は、似ていた。とても。

「ジャック、やめなさい」

たじろいた様子のジャックに、追い討ちをかけるように言うゼオンはひたすらに静かだ。

いつものほやほやしたような雰囲気はない。

日が上ったばかりの、温かな静寂のような彼。夜には似合わない。

「なんで出てくるかな!」

「この二人は、私の友です」

明らかにジャックはゼオンと知り合いであるようだった。しかも、ゼオンの方が有利な立場にある。

なんの武力も持たない彼が、どうして殺人狂を従えられるのか疑問だ。

だが、それは紛れもない事実。

「どうなっただよ」

その呟きに答えるものはいない。

闇に吸いとられるように、その問いはきえる。

「貴方は間違っています。そんなやり方ではいけない」

「……」

「目標を一つに定めなさい。ジャック」

何に対するどんな会話なのか、想像もつかない。

ただ、ジャックが不服そうなのだけは理解できた。眉を寄せ、子供のように唇を尖らせる。

「一つになんて絞れるもんか！ 僕はこの街に……」

「ジャック」

何かを言おうとしたジャックを遮るかたちでゼオンはピシヤリと止める。

はっとしたジャックは、小さく唇を噛むと、逃げるように走っていつてしまった。親に怒られたかのような、泣きそうな顔をした後に。

「……………」

「……………」

後には、月明かりと静寂、そして痛みと動悸だけがのこる。

痛みを誤魔化しながら、ゼオンの肩を叩こうとしたスゴウの耳は、小さな呟きを聞いた。

「…………プログラム・1、起動停止」

「……………は？」

プログラム？ 起動停止？ 戸惑いに手が止まってしまったスゴウ。

そしてゼオンが振り返った。

「さ、帰りましょうか」

ニコリと笑った顔で、ゼオンは少しだけずれた眼鏡を直した。

結果、スゴウの家に行き、それからルークを屋敷まで送った後に、ゼオンは自宅へと帰る事となった。

あの場面で、どうしてゼオンがその場所にきたのかは、今はまだ分からない。

.

第十一話：填まる齒車 人形狩りの長

あの夜のことは聞けず仕舞いのまま、スゴウは街を歩き回っていた。インドア派のゼオンと、あまり堂々と歩き回れない立場になったルークの代わりのつもりだったのだが、スゴウは自分がどんな立ち位置なのだか、本当の意味では理解していなかった。

「どうすっかなあ……でもなあ」

うろつろつと、ゼオンの家の周りを歩きながら、彼を訪ねる決心がつかずにいた。

しかし、そんな中でも、スゴウは周辺から感じる視線を逃してはいない。

少なくとも人通りの中から、数人分の視線が自分に集まっていた。見ているという範囲ではなく、監視していると言った感じだ。

いつもの事だし。と、溜め息をついたスゴウ。その彼に、フラフラとした足取りの男が、倒れ込む様にぶつかってきた。

「！ う、おいっ」

どうやら向こう側の店から出て来たらしい男は、日が高いにも関わ

らず、頬を仄かに赤く染めている。

考えるまでもなく、酒の飲みすぎだろう。

「……ぐ」

「おい、大丈夫か？」

うめいた男は、スッポリとフードコートを着ているので、その容姿は分からないが、声音は男というには少しだけ高い。

「は……吐きそう、う」

「お、お前、こんな道の真ん中で吐くなよ！？　くそ、もうちょい我慢しろ」

「も、申し訳ない……」

取り合えず裏路地にでも連れていこうと男を抱えたスゴウは、そいつの軽さに驚いた。

ひょい、と担げるほどだが、身長はスゴウと差ほど変わらない。

「かたじけない……うえええっ」

「ああ、ほら、そんないいから……全部吐け」

裏路地の端に付いている、排水用の溝に、今まで我慢していたものを吐き出している男の背を摩ってやりながら、スゴウは溜め息をつく。

「ちょっと待ってる。水持ってくるから」

ゲホゴホいつている男をその場に残して、スゴウは近くの店から水をもらってきた。

それでうがいをした男は、先程とは全く正反対の清々しい笑顔でスゴウに頭を下げた。

「助けていただき、心より感謝する。拙者、ツガサと申すのだが、貴殿は？」

「あ？ 俺？ 俺は……スゴウ」

花屋の女主人とはまた違った言葉の使い方に、どことなく戸惑いながら、スゴウ答える。最近、このような話し方をする人間をたびたび目撃したような気がするのだが、どこでだったかは忘れてしまった。

「……スゴウ…そうであつたか」

「は？」

「いやいや、こちらの話だ。気にしないで下され」

「ああ、そう」

もとより、初対面の人間と、和気あいあいと話をするような達ではないスゴウは相手が言った通りに気にしないことにした。

気にしたとしても、答えが出るようなことはないだろうし。

そうして去ろうとしたスゴウは、最後にちらりと相手を見た。フー
ドの丈より長い、その刃物。抜き身のままで下げているので、どう
も現実味に欠けるのだが、確かにそれは、それでしかなかった。

剣ではなく、刀という、凶器。

「今日は本当にすまなかつた。後日、お礼申し上げると共に、詫び
の品でも」

「ああ、俺は別にいらねえけど……くれるんならもらつとく」

「面白い方だな、貴殿は。おっと、それでは。拙者はこれにて」

「もう飲み過ぎんなよ」

と、怠惰に手を振り去ってゆくスゴウと反対の方向に進みながら、ツガサは足を止める。

「ツガサ様、いかに」

「あれがスゴウという男のようだ。聞くよりも遥かに出来る男だな……ただ今は何もするでないぞ？ アレに感づかれる訳にはいかん」

「は」

影の中から出てこないそれは、ただひたすらにツガサに忠実だ。ツガサもそれに慣れているようで、余裕が表情に見てとれる。

先ほどまでの失態が嘘のような、堂々としたたち振る舞いだ。

「直に時が来る。その時にどう動くか、あの男の反応次第だな」

「では、そのように」

そうして闇に消えたそれは、何の痕跡も残さずに溶けたような静けさだけを残す。それを確認したツガサは、ゆったりとした足取りで歩き始めた。

行先は、街のはずれにある古いビルの跡地。

“人形狩り”として集められた屈強な者たちが集う場所。

その“人形狩り”の長を務める男は、スゴウとも、街長とも、イン・ギアのリーダーとも、たいして外見の年齢は変わらない男だ。

「もう直ぐ、会えるぞ」

そう呟いて、胸に手を置いたツガサは、空を見上げ、わずかに目を細める。

「それでどうするかは、お前次第だ」

そのつぶやきは、誰に聞かれるでもなく、風に流されることもなく、しばらく中にとどまっただけで消えていく。

抜き身の刀が、光を反射して輝いただけで、あたりには人も疎らに、夕暮れに近づいていく時間を知らせた。

.

第十二話：填る齒車 刀と糸・技師と人形

情報と言つのは、時に困つたものだと思つた。

たぶん、情報を持つてくるのはスゴウでなかったらば、もう少し楽であつただろうにと思うことは多々ある。今が、その状態だ。

「場所とか……分かる？」

「分かりますよ、心配いりません」

「そう」

伝言でその情報を伝えてきたスゴウは、すでにその場所に行つてしまつたらしい。

だから、ゼオンは焦りの表情で、裏路地を駆けている。隣には、ガゼローフの姿が。

「スゴウを引つ張り戻しにいくだけですからね？　あまり悪戯しないように」

「うん。……僕って信用されてないのかなあ。そうか……信用されていないなら、別にここで死んでも」

「そういうことを軽く口に出すものではありません。……信用して

いない訳ではないですよ。ただ、念を押しただけです」

苦笑しながら言うゼオンにも、余り余裕はない。なぜなら、今回は
よりもよって“人形狩り”の本拠地に行ってしまったのだから。

彼の行動力と心臓の強さには呆れてしまう。

付き合い始めた頃からそうだったのだが、彼は“人形狩り”に敏感
すぎる。技師だからという理由にしては、いきすぎている気もする
のだが、こればかりは本人に聞くしかない。

「街外れにある、古い城壁跡らしいですが……」

「……ああ、あそこ」

ぼんやりと呟くガゼローフの指先で、キュイ、と糸が鳴る。

横目で見たゼオンは溜め息をついた。

「くれぐれも、悪戯はいけませんよ」

「……」

何も言わないガゼローフ。ゼオンの不安は募るばかりだった。

「スゴウ！」

一人も見張りのいない入り口。

中に入って、親友の名を叫んだゼオンは、はっとした。

「よ、速かったじゃん」

「スゴウ」

入って直ぐの広間にあぐらをかいているスゴウは、嫌味なくらいに笑顔だった。何もないにこした事はなかったのだが、それにしても静かすぎた。

「スカッた」

立ち上がり、溜め息をついたスゴウに、ゼオンは溜め息を返す。

「……全く、私たちがどれだけ心配したと思ってるんですか？」

「悪い悪い。別に死ぬような事もないだろうって思って」

悪びれなく言うスゴウ。ゼオンは何かを言おうと口を開いたが、結局何も言わずに、目がしらに指を当てる。

「危険ですから、今後は控えてくださいね」

「……無理だと思う」

ゼオンも、ガゼローフのいい通りだと思った。

しかし、やめてもらわなくては困るのだ。彼は少し、血の気が多すぎる。逆にガゼローフは、無さすぎるのだが。

「だってよく、筋通して話付けてやろうと思ったただけなんだぜ？」

「私達はいくまで平和的に事を進めなければいけないんです。武力はいけません」

どこか極道じみた言い回しでスゴウがズカズカと入り口へと歩き出す。

それを追うかたちでゼオンとガゼローフが続いたが、その足は、入り口から入る光が陰った事で止まる。

「お初にお目にかかる、ゼオン殿」

集団の先頭に立ち、黒いフードコートを来た男が言った。

聞き覚えのある声に、スゴウは一步下がって身構える。この声とあの姿。

昼間に会った男だ。名前は確か…ツガサ。

「ツガサ……だったな。お前、まさか」

「スゴウ殿。まさか初めに来るのが貴殿とは思わなんだ」

「……“人形狩り”か」

フードを取り、笑う彼は、二十歳前後だろうか。独特の鋭い目付きに、結わえられた黒髪。そして腰の刀。

当にこの大陸からは姿を消したと思っていた一族の特徴そのものが、そこにいた。

人形の始祖。自動で動き話すカラクリ人形を、人類で始めに作り出した、東の民。

故に彼等は、一人で人形を造れると言われている。

人形師と技師のいる他の人間と違って。

「いかにも。某 “人形狩り” にて族長をしておる、ツガサと申す。以後、お見しりおきを」

「私は “反人形狩り イン・ギア” リーダー、ゼオン。……覚えおけと言いながら、なぜ剣に手を伸ばすのです？」

一瞬、火花が見えた。

こうして強気に言っているゼオンだが、彼には戦闘能力が全くない。逃げ足や、知識は豊富であるのだが、いざ戦闘となると、それを活用できないのだ。

「おい、ゼオン」

警戒して前に進みでようとするスゴウを手で制し、ゼオンはツガサを見据える。余裕の笑みを浮かべるツガサは、抜き身の刀に手をかけたまま、瞳を細める。

「……。中々、おつなことを」

「？」

彼の言葉をかわきりに、後ろの集団から声が上がりに始める。ざわめきが、罵声に変わり始めるのに時間はかからない。

何が起きているのか分からないゼオンとスゴウは、困惑の表情でツガサと“人形狩り”の面々を見る。

と、きい、と扉が開く音がして、いつの間にやら姿を消していたガゼローフが、影になっている部分から天窓の明かりの中に出てくる。いつものやる気のない表情ではなかった。

人を寄せ付けないような、そんな鋭い表情は、スゴウもゼオンも通り越し、ツガサに向いている。更に言うなれば、彼の持つ刀に。

「……帰ろう、ゼオン、スゴウ」

ぽつんと言われた言葉を、その意味の通りに受けとるのに、なぜか時間がかかった。

「あつちに裏口があるから、そっち通ろう」

「おいっ！」

「え……ええ」

有無を言わせないというように、スゴウの腕を掴んだガゼローフが、振り返った瞬間だった。

「待て、貴様」

瞬間に聞こえたのは、ブチブチと糸を引き千切る音。同時にガゼローフの指先から血が滴る。

無理矢理引き千切られた糸が、ガゼローフの指に食い込んだのだらう。

「この……キチガイが！」

「……」

しゃりん、と音をならした刀は、ガゼローフの鼻先を通りすぎる。

突き飛ばされたスゴウは、ものの見事に転び、ゼオンに気遣われる。ガゼローフは気にした様子はない。

「やっと見つけたぞ、裏切り者が！ 八十余年、一族と巫女様の恨

み、晴らせていただく！」

「……ああ、そう」

それを聞いた瞬間、ゼオンの頭に余切った感覚は、彼を動かすのに十分だった。

ガゼローフは、避けない。避けなかった。

だから変わりに斬られたのはゼオン。しかし、それによって血が流れることはない。

「人形……！」

「違えよ、機融人だ！　おい、ずらかるぞ！」

「はい！」

服も皮膚繊維すら切り裂かれたゼオンの肩は、銀色の骨組みが覗いていた。

それは鉄ではない。銀だ。

「あれは……巫女殿の」

ゼオンが姿を消した瞬間、動けなかった “人形狩り” 達の呪縛がとかれる。いきり立った彼等が、裏口への扉へ殺到するのを見て、ツガサが声を張り上げた。

「やめい、屑どもが！」

「……ツガサ様」

「なんだ、カゲ」

「あの輩、追い掛けますか」

「ああ。我が一族と巫女様にかけてな」

「は」

自らの支配下にある人間を押さえ込みつつ、部下に指示を出す。

それから彼は、一族と巫女様の事を思い出す。

カラクリ人形の技術を急激に発展させた異国の巫女様。金の髪で、碧い瞳の……そう、あのゼオンと同じ。美しい女性だった。

『私の弟よ』

そうして紹介された、彼女と似た少年。

戦争に出た彼は、人形側ではなく人間の側として帰ってきた。姉で
ある巫女様を説得しに。

それなのに。

あの男は巫女様を殺した。あの、ガゼローフという男は。

「許しはせぬ」

一族を死にいたらしめ、巫女様を無為に殺したあいつを。

巫女様と弟の和解を無いものとしたあいつを。

恨んでも恨みきれない。人形師の端くれであるくせに。

この刀に誓って、いつか、殺す。

第十三話：填る齒車 過去の欠片

「……ガゼローフ、先程の話ですが」

「……」

無言のままツエナ邸に帰りついたガゼローフとゼオンとスゴウ。

ツガサという東の民から受けた傷。

スゴウが見た結果、肩や腕の機能的には全く問題は無いと言ったとで、皮膚部分の繊維を縫い合わせればいいだけとなった。

よって、この部屋にはゼオンとガゼローフしか居ない。

スゴウは向こうの部屋でツエナと話でもしながらゼオンを待つているはずだ。

「貴方が……あの人を殺したというのは、本当なのですか」

「……うん」

すすいと手を動かしてゼオンの肩を縫い合わせながら、ガゼローフは頷く。

「オリティーンだけじゃない。もっと沢山殺したよ。人形を造る人も、機会を造る人も、ゼイオンを殺したのだって僕さ」

「……」

「怒らないんだ」

「ええ。私はその様にプログラムされていませんから」

そのゼオンの答えに、ガゼローフの手が止まる。

プログラム。そう。人形は人形。どれだけ人間らしくとも、所詮はプログラムなのだ。プログラムがどれだけ緻密に、どれだけの分岐を持たせているかによって、人形の柔軟性は変わる。

「私は、私の父が自分の姉に似るようにと創られた人形。私の父は矛盾していましたね。それは貴方がよく知っている」

「……人形が好きで、技師でもあるくせに、人間側についた変な奴」

一旦針を置いたガゼローフは、縫い目に特殊なノリを塗りこんで縫い目を消す。

「貴方だって似たようなものじゃないですか？ 人形師のくせに人間側につくんですから」

「死にたくなかったから」

あの頃は。と、ガゼローフは呟く。今は真逆だ。死にたくて死にたくて仕方がない。

「人間は、無いものを求める。ゼイオンは人間と人形との完全な共生を。オリティーンは人形達の樂園を。交わりそうに交わらない世界」

「父は、あの人に話に行つたじゃないですか」

「うん。けどね、オリティーンは……オリティーンは人間の殲滅を宣言した」

「……」

それは二人が知っている、歴史に埋もれた事実。

「オリティーンが都市ごと人間を爆破するなんて言うから……僕はオリティーンを殺した」

大地を尽く破滅へ導くとされていた、大地の武器、人形側の最終兵器であつた地熱爆弾。それが使われなかつたのは、唯一爆弾の起動法と爆弾の有りかを知っていた人物が死んだからだ。

そしてその代わり、人間側の兵器が大地を貫き、人形を焼き払った。空の武器、宇宙兵器だ。

「そのせいでゼイオンは希望を捨てたんだ」

「……私の父は、人間と人形が共に生きていく事は無いと悟ったのでしょう。唯一の肉親を奪った貴方に刃を向けて」

「返り討ちにあつた……君の目の前で」

「覚えていますよ。まだ」

目をつむり、思い出すようにするゼオンだが、結局それは人間の真似事に過ぎない。

ゼオンの父、ゼイオンが姉のオリティーンの思考に似せて作った人形。

ゼオンは日々自分が出来上がって幾度に思っていた。徐々に崩れ行く父を。自分を創りながら、涙していた父を。そして何度も自分を壊そうと手を振り上げた父を。

最期に自分を見た父は、笑っていた。自分の手を握ったゼオンを『姉さん』と呼んだ。それにゼオンは、優しく微笑んで見せたのだ。

プログラム通りに。

「父を斬って逃げ出した貴方が、まさかまだ生きているとは思っていませんでした。しかも人形師だったなんて」

「……人形は、死ねなくなってから創り始めた」

縫い目を消すノリを塗り終わったガゼローフは、上から染料を振りかけ、刷毛で馴染ませて行く。

少し白っぽかった場所が、人間の血の通った皮膚のような赤みのある色へと変わる。

「死にたくないと考えることもなくなってから思ったよ。死にたいのに死ねないのは……死にたくないと願うよりも辛いって」

ぼんやりと囁くには重すぎる言葉。

人形と人間。その二つを動かしたのは二人の姉弟と一人の男。

死にたくない男は、自分を含む人間を滅ぼそうとした魔女を手にかけ、魔女の手先を殲滅。

これで平和になったかと思えば、魔女の弟で親友だった男が自分に刃を向けてきて、彼を殺してしまった。死にたくないから。

死にたくないくて死にたくなくて、生きていられる方法を探し、ついに手に入れた男はフと思う。

既に死にたくないという不安からは解放された。だが解放されたところで、自分は何の為にここにいるのだらうと。

沢山の人間を手にかけた。親友も居ない。

時が流れるに連れ、見知った人間はどんどんとしんで行く。

死にたくない男は、死ねない恐怖を知った。死ねない苦しみを知った。

「親を失って、何も分からずに追われる人形と同じ」

「自分では、死ねない」

人形に、自殺のプログラムは存在しない。自然に壊れるのを待つしかない。

「貴方は、この先どうします」

「……」

完全に元に戻った肩を見て、ゼオンは言う。ガゼローフは道具を片付けながら答えない。

「私は、貴方を止めません。貴方がしたいようにして下さい。誰も

見ていない所でなら……貴方が自殺まがい殺されていても、私は誰にも何も言わないでしょう」

「それもプログラムなの」

「ええ」

「僕への復讐のつもりかと思った」

パタン、と箱をしめて振り返ったガゼローフは、一瞬目を見張る。

ゼオンがオリティーンに見えた。

人形側には女神と呼ばれ、人間側には魔女と呼ばれ、東の民には巫女と呼ばれた女。オリティーン。ゼオンのオリジナル。

微笑む様が瓜二つ。

そしてゼオンは言った。

「復讐のなら、再会した日から、ずっとしていますよ。拷問の様にね」

見るたびに思い出す、今思えば、罪にしか思えない所業。

「そうだね」

肩をすくめたガゼローフは、考えることを止めた。プログラム。

ゼオンの行動は、プログラムなのだ。そしてプログラムを設定したのは、親友だったゼイオン。

彼は自分に切りかかる間際、負ける事を前提として、ゼオンに復讐のプログラムを埋め込んだのだ。

「……」

パタン、と閉まった扉。スゴウの声と、ツエナの笑い声。部屋の戸を開け、何時もと変わらない様子で会話に混ざるゼオン。

一人部屋に残ったガゼローフは、そこにあつた針で思いきり自分の手の甲を机に張り付ける。針は机に刺したまま、手を針から抜くと、わずかに血が着いているだけで、傷口はない。

思わず吹き出した彼は、手を握り締めて呟いた。

「化け物じゃないか……僕は」

人形よりも、たちが悪い。

.

第十四話：填る齒車 ジャックと少年

嫌な夢を見た。

ママが自分に覆い被さっている。

瞬きせずに、銀に煌めく剣を見る。片方にしか刃のない剣。背の高い男。

ママを殺した男。

世界で一番殺したい男。

「……」

「いんにち…わ」

金髪隻眼の殺人鬼、ジャックを前にして、その少年は舌足らずに、
転んだままの格好でそう言った。

ぼんやりと覚醒しきらない頭で少年を見下すジャックは、青の瞳
を細める。

長い髪。

「君、女の子？」

「おんなのこ……？ おとこのこ」

「はあ？」

少年の言葉に要領を得ず、ジャックは未だに起き上がらない少年
の頭上に立ち、しゃがみこんで、その顔を覗きこむ。

薄い白に見えなくもない、水色の髪。外着には見えない薄い衣。
人形のような、感情のない表情。

「……」

「……」

見下すジャックを、じっと見返す少年。そこに会話は無い。

「金色」

「は」

いきなり言葉を発した少年は、グイッとジャックの金髪をつかんで引っ張る。

「金色……ぜおん。金色」

「お前……何」

見知らぬ少年の口から出てきた、見知った男の名前。一気に不機嫌になったジャックは、少年の手を振り払おうとしたが、彼の手に当たる前に、少年は髪から手を話していた。

絶妙なタイミングで。

少々カッとなったジャックが、少年の胸ぐらを掴むが、彼はぶさらがったまま微動だにしない。

「……」

本当に、反応しない。

誰の侵入も許さない路地裏。ジャックの犯行の形跡が残るそこで、少年は何も感じていないようだ。

「あ、おひるだ」

また、突拍子のない事を言った彼に、ジャックは苛立ちを募らせるばかり。

だが、次の瞬間、苛立ちが驚きになる。

「おひさま、まうえ……おうち、かえる」

そう。気が付いたら、少年はよちよちと、大通への道を歩き出していた。

軽々とジャックの腕を通り抜けて。

「!」

「にいさまに、おこられちゃう……」

なんて言いながら、おぼつかない足取りで彼は、歩く。

後ろのジャックに、何の警戒心も抱かずに。警戒する価値すらないように。

「きょうは、みんなで、おちゃかい……」

ティオとユキが来る。

少年、アークはそのまま家まで歩いて帰った。

自分が、どんな目にあっただかも分からずに。

それは、人が望みすぎたがゆえに始まった戦争。

『なあ、お願いだから』

父さんが言っていた。

『お前にしか頼めないんだ、お前なら出来るだろ』

だってもう、人殺しなんだから。

と、仲間に向かって平気で言えるようになってしまった父さん。

『一人も二人も変わらないだろ、だから』

殺せと言う。

私が愛した父さんではなくなった、でも私の父さん。

『頼むよ、ガゼローフ』

すがりつかれ、ただただ困惑と不安と恐怖の表情で追い詰められた彼は、それでも首を縦には振らない。

『そうか、駄目か……』

私が立って、その光景を見ていると知りながらも、父さんは笑った。

笑って、手元にあった中ほどの剣を振り上げる。

『ゼイオンッ!!』

ガゼローフは叫んだが、父さんは止まらない。薄ら笑いを浮かべて、何度も剣を降り下ろす。

机の上、棚、壁に掛けてあったもの。それら全てを破壊して、ガゼローフは逃れて父さんは追う。

だが、ここは狭い。逃げ切れるはずもなく、ガゼローフはついに扉を背にして追い詰められた。

ガチャガチャとなるばかりの扉に、剣が刺さる。

『……悲しいんだ、虚しいんだよ、ガゼローフ』

うつ向き、笑う父さんを、彼はどう思っただろうか。

『俺を、殺してくれ、ガゼローフ』

そう言いながら、剣を振りかざす父さんの矛盾に、私はそうなるまで不可解で仕方なかった。

ガゼローフが、剣を引き抜き、父さんを切り捨てる瞬間まで。

『……ぜ、ゼイオン……？』

条件反射だったのだろうか。

暫く硬直していた彼は、恐る恐る倒れ伏した父さんを見下ろし、後退り、逃げ出した。

その光景を見ながら、私は……

「おや、今、おかえりですか？ アークくん」

「……金色」

「はい？」

遠慮なく引っ張られた長髪。

。アークはその手触りを確かめるように指先で擦りながら、しきりに『金髪』を連呼する。いきなり髪を引っ張られたゼオンは、嫌な表情一つせずに、黙って微笑んでいる。

ついこの間まで、言葉を話すことすらできなかったアークの回復具合が嬉しいのだ。

「ま、話しかけてやるとか、人が話してる所にいれば、普通に回復してくと思うけどな。もとから頭の出来はいっぱいから、悪くて一カ月程度じゃねえの？ そこら辺はテイオにでも任せておきやあ心配ねえだよ」

樂觀にもほどがあると思ったスゴウの意見だったが、あながち外れではないのだろう。

「あ、チヨウチヨ！」

直ぐに他へ興味が移ってしまうのも、順調な回復の目安らしい。

「微笑ましいですね」

呟いたゼオンを縁側から見つめていたスミレは、そのゼオンの様子を微笑ましく思う。いつからかは分からない。けれども最近、ゼオンの様子がおかしかったのは確かだ。何かを考え込むようにしていたかと思えば、ため息ばかり。

実のところ、スミレは人を保護するために場所を提供しているだけであって、インギアの活動に参加している訳ではない。

「何だかうれしそうだね、スマレ」

「あら、ツエナちゃん。今日は天気がいいのに……大丈夫なの、外に出て」

「うん。直接日光に当たらなければ問題ないよ」

日傘をさして、黒い手袋をはめた、人形のような彼女。その彼女に付いてきた、暗い表情の青年が無言で、店先に花を置く。

「カスミ草。今年も可愛く咲いたんだよ」

誰も知らないだろう。この街に花屋が存在する事を。そして花に囲まれた住まいが存在する事を。

機械に埋もれ、その機械に恐怖し、そして枯ゆくこの街の人間は、誰も知らないだろう。自分達の住む街に何が起きているのかも分からず、ただゲーム感覚で、いたずらに人を落としているようなこの街の人間には。

「これから、この街はどうなるんやろなあ」

「さあ。でも、僕達がやれる事をやる事には変わらないよね。信じれば、世界だって変わるよ!」

「そうならええんにね」

紫の花。董をあしらう白い着物の彼女は、薄く笑うばかり。

世界を変えられると本気で考えているツエナを、少しうらやましく思っていた。彼女には、明るい未来が見えている。けれどもスミレに見えるのは、そこにたどり着くまでの苦難。

「確かに、そうなるまでは大変だろうけどさ……」

スミレの考えを呼んだかのように言うツエナは立ち上がり傘越しに空を見ながら、幸せそうに、心強そうに微笑んでいた。

「大変だからこそ、僕らがいるんだよ。皆がいれば大丈夫！　なんてね」

太陽に愛されなかった少女。その代り、彼女は強かった。身体能力的にも、心にしても。

「ガゼローフ、帰ろっか」

「……ああ」

洋々と帰るツエナ。その隣をゆくガゼローフ。彼の表情はいつにもまして暗い。それでもツエナは変わらないだろう。彼女がいる。それがガゼローフにとっては大事なのだ。ただそこにいるだけで、彼はたぶん救われる。

人形のように汚れなく、一点の曇りもなく美しい彼女がいれば。

コンコン、と咳をしたルークは。大きく息をついて、かつては父が座していた場所から街を見下ろした。

人形狩り。インギア。ジャック。

この街に住んでいる人間の何人が、事の重大さに気が付いている

だろう。たぶん、誰も分かっていない。現実味がない。平和ボケをしている訳ではないが、この街はどこか可笑しい。

街と住民。住んでいる世界が、そもそも違うというような感覚。これは前街長が全てをひた隠しにしてきたせいであるとルークは思っていた。

だからといって、今さら隠してきたことを曝け出したとしても、誰も相手にはしないだろう。若い街長が何かおかしなことを言っている。そんな馬鹿な、と。

だから、全ての長でありながら、ただの人でしかない、ルーク。

「どうしたら変わる？」

街に、自分に問いかける。

不安要素ばかり。どうしてこんな街になってしまったのだろう。なぜこんな街になったのだろう。

全ては八十年前の戦争から始まった。あれさえなければ、人形も、人間もうまく生活出来ていたのかも知れないのに。

「げほっ」

また軽く咳き込んで、ルークは椅子に座り直す。

まずはジャック。彼を何とかしなければなるまい。彼は一人。会
話で解決できるなら、それに越したことはないのだろうが、それは
難しいように思える。あの日見た彼の眼は、誰の言葉も聞き入れな
いような赤。

「……けほ」

決定的な解決策が見つからない。ルークは唯、書類を見て、小さ
く咳をするばかり。

第十五話：填る齒車 復讐の赤

どうしてだろう。それは急に思い出した事だった。

『お前にだけは教えてあげる、これが私達の最後の希望』

それはママに手を引かれて連れて行かれた場所。この街の、ずっとずっと下にある場所。

『もし、もしこのまま、ママがいなくなったら、お前だけではどうにもできなくなったら、これを使うのよ。でも、これを使ったら、お前も生きてはいられないかもしれない』

ママ、僕は人形だもの。最初から生きてはいないんだよ。僕は僕のまま大きくなって、普通にしてもママより長く生きるんだ。だから、僕はいつか、本当にこれを使う日が来るんだと思ってた。

自分が壊れてしまいたくなったその日に、使ったと思ったた。

でも、そうじゃないって、ママには分かってたのかな。

誰もいない暗い路地裏。例の端の上で、ジャックはぼんやりと目を覚ました。いや、人形である彼に、目を覚ました、という言葉は当てはまらない。彼はプログラムの起動を終えたのだ。

何十年も後に思い出すように、凍結させていた記憶という名のメモリ。それを解凍したジャックは、視線を下へ下へと落とす。

それは、最終兵器。地面の下から、街を滅ぼす物。

「……」

人間そのものに見える手。人間みたいにくるくる変わる表情。人間のように考える思考回路。人間と同じく起伏する感情。

全部、なくなってしまうばいいのに。

そうすれば、母親恋しさに苛まれる夜なんて来ないのに。人を殺すこと。そんな最大限の刺激で押さえてきたものが、もう抑えられなくなってきたている。

最大限の刺激も、回数を重ねるたびに薄れていく。

「こんな世界、壊れてしまえばいいのに」

僕を生んだ、こんな世界。僕からママを奪ったこんな世界。幸せと不変の繰り返しを勘違いしてるこんな世界。

「全部、壊れればいいんだ」

兄さんも。

そう思って、ジャックの手が止まる。彼は、ゼオンは何をしたいのだろう、と。

自分がそうであるように、ゼオンにも何かしらのプログラムが設定されているはずなのだ。彼はそれに沿って行動しているはず。それが何なのか、ジャックには分からない。

ゼオンは、ジャックの目的を知っているのに。

「……」

自分の邪魔をしたような事もあった。インギアとか言う組織を立ち上げて、街を守ろうとしている。けれども、それが設定されたプ

ログラムに関係あるのかが分からない。

人形には通常ありえないが、インギアの行動が彼の個性なのだとしたら。

「兄さんは、何をしたいのさ」

鼻で笑ってみても、何も始まらない。だから。

だから今日も、誰かを殺しに行こう。そしたらきっと、彼は来る。あの黒い髪 of 技師を追いかけて。

「だあかあらあつ！ それは俺の勝手だつて言ってるじゃえか」

「いいえ。ものには限度があるんですよ、スゴウ」

腕を包帯でグルグル巻かれているスゴウ。そしてグルグル巻きにしてるゼオン。

「またやってるよ」

「あれは仕様がななんだよ。意見のソオイってやつ」

「相違だよ、テイオ」

たまたまゼオンに絵の描き方を教わりに来ていた、ユキとテイオとアーク。

驚異的なまでのスピードで回復を見せるアークは、すでに普通に会話ができる様になっていた。時々、単語を思い出せなくなるような事にはなるらしいのだが。

「最近おかしいんだよ。街の連中も、人形狩りも、ジャックも。様子見にいっただけだったの」

「じゃあ、なんでこんな怪我をして帰ってくるんですか」

「……枝に引っ掛けたんだ」

これほど深く鋭く皮膚を避ける枝なら見せてもらいたいものだ。そう思うほどによく切れている。

「大体、想像はつきますがね。……大方、ジャックのところにも行ったでしょう」

「う…、あ、ま、まあな」

少々ご立腹気味のゼオンの様子をうかがいながら、激しくうろたえるスゴウ。ゼオン相手に隠し事ができると思っているのだろうか。

「……ちょっとかわいそうだね」

クレヨンで画用紙を塗りつぶしながら、ぼそつと雪が呟く。同じように一心不乱に画用紙に向かい始めたアークは何も返してくれなかった。

「かわいそうっていうか、身の程知らず？」

「おい、聞こえてんぞ、ティオ」

輝かんばかりの笑顔で言ったティオを、スゴウの千里眼が睨む。それを奇麗に無視して、ティオは、それが何なのか分からない謎の

生物を描き続ける。

軽くため息をついたスゴウは、あきれた表情のゼオンが入れたお茶を受け取る。

「全く……無茶はしないで下さいと言っているじゃないですか」

「個人的に無茶してるつもりはねえんだけどな。俺だって、出来ねえって思ったことはやらねえよ」

「本当ですか……？」

信用ならない。怪我をしまっている時点で、無理をしているようにしか思えないのだが。

「無理してない。これぐらいで無理してるって言われたら、人間、なんもできねえって。死ななきゃいいんだ、死ななきゃ」

窓の外に視線を向けるスゴウ。だが、本当に死ななければ何をやってもいいんだろうか。ふと浮かんだのは、ガゼローフ。死んだように生きているのは、無理をしているという風にとらえていいのだろうか。

「ところでゼオン」

「……」

「ゼオン？」

「……はい？」

「具合でも悪いのか」

「いえ。私は全く。少し考え事を」

薄く笑ってみながらも、やはりどこか抜けているような雰囲気、スゴウは何も言わずにお茶をすすする。

ジャックとゼオンが顔を合わせたあの日。あの日からスゴウは、普段以上にゼオンを観察し始めた。別に敵としてどうこうという訳ではない。彼の様子がおかしい。けれども、彼は話してくれないし、自分からもきけない。外から見るとしかできないのだ。

ここにきて、ずいぶん臆病だと笑われるかもしれないが、彼は特別なのだ。それは彼の整備をしてみてもよく分かる。

スミレの花屋にも、機融人の身体検査のような形で、腕や足など、体の部位の整備をしに行く。彼らの場合、大体が大戦前後からの医術として発展した技術、ようは義足や義手、と言った感じの構造なのだ、ゼオンは違う。

技師だけではなく、人形師でしか分からないような、高度で緻密な技術で作りだされている。しかも、それらを模るのは、鉄や銅などではない。銀。大戦後の大地にはもう残されていない、美しく輝

く白銀だった。

部分的に、ごく僅かに銀を使った部品が装備されている者も確かにいる。けれどもゼオンは全てが銀なのだ。

いうなれば、ありえない。普通ではあり得ないのがゼオン。彼は
大戦がはじまる前から存在していることになる。それに、本当に人間かどうか、怪しい。

人形。

「ゼオン、俺、お前に聞きたいことがあるんだよ」

「何でしょう？」

変わらぬ様子で、余裕の優しい笑み。出会って頃から全く変わらない姿。達観している意見に、誰もが知らない事を知っている。この街の仕組みも。

「お前、本当は、に……」

んぎょうなんじゃないか？　そう続くはずだった言葉が、響いた爆音に消される。

爆音。それはこの街に来て、今だに一度も聞いたことのない音だ。そんな破壊兵器、この街にあったことすら知らなかった。

「そんな！」

テイオとユキ、そしてアークを部屋に残したまま、外にでたゼオンとスゴウの視線の先。そこには黒煙が上がっていた。無駄に高いビルとビルの間から見えるそれは、明らかに常軌を逸していた。

「あり得ない……なぜ今頃、そんなものが」

考えるより先に行動を起こしてしまうスゴウ。茫然と呟いたゼオンを置いて、一人走りだす。

見なければいけない。何が起きているのか。

「怖気づくな。何のための千里眼だ、てめえ」

自分を勇気づけるように言うスゴウ。彼は新しい真実に触れることに弱い。一度理解してしまえば、触れてしまえばどうってことはないのだが、それに行きつくまでが長いのだ。けれども、こんなことはそうも言っていない。

ここで引き下がっては男が廃るというものだ。

後ろを追いかけてくるゼオンの足音を聞きながらも、路地を抜け、

人のうちの敷地を通り、最短距離で駆け付けたその現場にいたのは……。

「やっぱりてめえらか！」

黒い髪、切れ目の男。

燃え上がる炎をもともせず、数人の手下を連れて、崩れた建物の前に立っていた。

「ああ、ここには人形が数十体住んでいたと聞いたのでな……旧世代の兵器を試してみただけのこと」

「お前、人形はもういねえっていったろ！ そいつらは……」

「己の命を長らえるためだけに、人形になる事を善しとした愚か者ども。違うか？」

有無を言わさぬ彼の目。人形狩りの長、ツガサは感情の見えない冷たい目つきで言い放った。吹いた風と、その風にあおられて大きくなる炎。

「違いますね。私はあなたの意見に賛成することなどできません」

気迫、というのだろうか。ツガサの放つそれにスゴウが吞まれかけたとき、追いついたゼオンが、炎の光に目を細めながらも、言い返した。

その彼を見て、ツガサは薄く笑う。

その笑み。スゴウが彼に初めて会った時には想像もしていなかった、暗い微笑み。見ていて、ぞっとするような。

「そうだろうて。お主には、理解ができなくて当然」

どん、とまた別の場所で火の手が上がる。人の悲鳴が聞こえては消える。それがどういう意味なのか、スゴウは二択答えに行きついた。

誰かの先導で逃げおうせたか、巻き込まれて死んだか。

この街とて、決して人は少くない。むしろ多い部類に入る。八十年前の戦争。あの時に生き残った生命全ての為に作られた、いわば箱庭。戦場で生き抜いた命、全てが詰まった場所。

本来ならば、人の痛みが分かる者同士が、互いを尊重しあい生きていた場所のはずなのに。

「人形遣いに飼われていた貴様には分かるまい。人形の貴様には、我々の憎しみは分らん！」

飼われていた。その言葉に、ゼオンが明らかな不快感を表す。

「飼われてたって……ずいぶんだよね、兄さん」

ゼオンが何かを言おうと一歩踏み出した時、そいつは炎の中から、炎をまとったまま現れ、そして目の前にいた男を切り裂き、更に切り裂き、薄く笑った。

「ママを、馬鹿にしないでくれる？ カラクリ師風情が」

ゼオンとよく似た金の髪。今はまだ青い、赤布に隠された隻眼。手にしたナイフは銀色に煌いている。

「いいね、これ。本当は旧世代兵器なんて大っ嫌いって言いたいところだけど、これよりも効率よく人を殺せそうで……ねえ僕にも頂戴よ」

「……く、黙れ、人形！」

「あれ？ どうして僕が人形だって知ってるのさ？ あれれ、僕と君は知り合い？」

「！」

たぶらかす様に笑うジャックに突きつけられたナイフ。ツガサは言葉を失い、ゼオンとスゴウは動けない。

「僕、覚えてるよ。君に似た人がたくさんいた者。ママが、滅ぼした人たちの……マツエイって言うんだっけ？」

「……、貴様、たばかるな！ 我々は、ただ巫女様の」

「その巫女様に滅ぼされたんでしょう、君たちって」

「違う」

「どこが」

人間なら絶対に出来ない芸当。こうして話している間、ジャックの腕は一ミリも動かなかった。人間なら筋肉の運動のせいで、静止していることは到底出来ないはずなのに。

彼の笑みは、全ての心を揺るがす。そして、何かを壊す。

振り上げられた剣。彼はそれにほほ笑んだまま。

第十六話：填る齒車 報復の青

ヒュン、とナイフが白い肌を裂く。

「くっ」

何を考えての行動なのか理解が出来ないが、狙われたとあつては逃げるわけにはいかない。ツガサは避けつつ、何とかジャックのナイフを受け流していた。

「ジャックー!!」

ジャックを止めようとしたゼオンを、掌が制す。ツガサの相手をしつつ、目だけを向けて、彼は言った。

「どうして止めるの？ コイツは“人形狩り”じゃないか。しかも一番偉い奴。死んだ方がやりやすいでしょ」

そうして一歩大きく踏み出す。

それはまるで見せ付ける様だった。自分は、人形だと。

「……っ！」

「こういう事だよ。人形を相手にするってのはさ」

ジャックの腹をつき抜けた銀の刃は、ただつき抜けたただだった。

彼には痛みもなければ、それによって制限されるものもない。刺さった。それだけの事。

「君は何のためにこんなことをしているの？」

心臓に突き付けたナイフは動かさず、貫かれた事も気にせずに、ジャックはツガサに問う。

汗を浮かべながら、警戒の見える声音で、ツガサは答えた。

「復讐のためだ」

「誰の？」

続けて、状況は変わらない。

「……我が一族と、我等が巫女様の」

「そう」

それを聞いて満足したのか、ジャックはツガサの胸からナイフを外し、何歩か後ろに下がって剣を抜き去る。

それからゼオンを振り返った。

「だってさ、兄さん。復讐のためだって。僕と一緒になんだよ。……だからって、仲間ゴッコするつもりはないけど」

止めることなんて出来ない、といたいんだらうか。

「彼の邪魔はさせれないな」

「標的が人形であつても？」

凜とゼオンが尋ねても、ジャックはさもおかしそうに笑うだけ。笑いながら、ゼオンとスゴウを見る。

「何言ってるのさ。人形はもう居ないよ。分かってるくせに。僕と兄さん。それで最後さ」

ツガサには聞こえないように、声を潜めた。

やっぱりそうか、とスゴウは目を細め、ゼオンの金髪を見やる。人間と同じような柔軟性を持つ、けども人間ではないゼオン。

彼は、それでも人間を守る。

ジャックや人形狩りと同じ様に、恨んでもいいはずなのに。

「僕はこの囲われた世界の命が無くなることを願ってる。使えるんだよ、“人形狩り”はさ」

くすくすと笑うジャック。ジャックは、ゼオンに全てを話す。隠す何てことはしない。

それはジャック自身、無意識でのことで、ゼオンもそれを意識することはない。おかしい話だが、昔からそうだった。

「ジャック。どうしてこんな事を」

「ママの復讐。それだけ」

「この街の人間には、何の罪もないでしょう……」

「この下に、皆が埋まってる。ここの奴らは、それを知りもしない。死んだって生きてたって、僕には関係ない。思い知るといいんだ。虐げられて捨てられた皆と、ママの恨み」

全員殺してやるから。炎を背に、まるで悪魔の様に微笑んだジャック。

彼に重なって見たのは、ゼオンの父、ゼイオンの姿。

「殺すなんて、言わないでください」

いつの間にか姿を消したツガサ。

消防の音が聞え、スゴウはゼオンの肩を引っ付かんで、路地裏を進む。

「やっぱ、人形だったか」

「はい。すみません、騙すつもりはなかったのですが……」

「別に気にすんな。お前が人形だろうが何だろうが、お前はお前。それでいいじゃん」

いつも通りの笑顔。いつも通りの会話。

スゴウなら変わらないだろうと思っていても、やはり嬉しかった。

「会ったときから思ってたぜ、お前人形だろうなって。体の作り方

からして、人間様のパーツじゃなかったからな。それに素材にしたって、大戦前のだし……人間の寿命敵にそれはありえない」

俺のジジイは死んだからな、とスゴウは小さく笑う。彼の師匠とも言える技師の老人は、自らの体の大半を自分で作り上げた義体で補っていた。それは彼が大戦の経験者であって、第一線で人々を救っていた人物であつたからだ。

その老人は、もう数十年前にこの世を去つた。

「そう言うことだ。多分、ガキ共以外、皆分かつてるんじゃないかな。分かつてなくても、たぶんそんな気はしてるんじゃないかな」

それは遠回しな言葉だつた。多分、スゴウは「気にするな」と、言いたいのだろう。

「分かつてますよ。『イン・ギア』の仲間なんですから」

人形の為ではない、人間の為の組織。でもそれを立ち上げたのは、世界にたった二人だけになった、人形の片割れ。自分によく似た人間が殺されるのに黙っていられなかった人形は、至極人間的であると思う。それは人形という枠に入れては置けないほど、人間然とした人形。

「私は分かってますよ」

人間が、それほど愚かではないことを。

呟いたゼオンに、スゴウは、ホントかよ。と笑いながら、ただただ石畳の道を走っていた。

人に指図されるのは嫌いだと言いながら、人は結局、誰かの存在なしには生きていけない。それを思い知った日に、彼の地獄は始まった。けれどももう、その地獄すら、地獄と感じないほど、彼はそ

れにのまれていた。

たん、と響いたのは、包丁がまな板に突き刺さった音だった。

「ガゼローフ？」

日の下を歩くことのできない、白の人形姫。ツエナの声に、ガゼローフはゆったりと顔を上げた。

「どうかした？」

「いや」

何を考えていたのかすら思い出せなかったのだが、良い事ではないのは確かだ。空虚な時間だったには違いないが、それでも手は的確に動いていたらしい。最後、まな板に包丁を刺すまでは。

「困ったね、ガゼローフ」

「え」

「なんだか困ってるよ、ガゼローフ」

そうだろうか。そう思いながらも、彼はまな板に刺さったままの

包丁を引き抜き、貫通しきらずに穴が凹みができてしまったまな板を水で流す。困っているだろうか、自分は。

余り長い間、様々なことを考えていて、結局は答えにたどり着けやしない。何年も、繰り返し、繰り返し。

「困って、るか」

「うん」

穏やかな笑顔のツエナを見ていられなくて、ガゼローフは視線をさ迷わす。呆れ顔になったツエナは庭を見た。

自分とは違い、身体中に日の光を浴びる花達。

「……困ったねえ」

もう一度呟いてみても、ガゼローフ自身が、何に困っているのか、気付くことはなかった。

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4812a/>

インギア

2010年11月4日13時38分発行